

壇浦兜軍記

第一

宵に起き^{よひおき}肝^{ひた}けて食^{しよく}し、夜^{よは}に念^{おも}ひ朝^{あした}に行^{おこな}ふ。故^かに虞^{かろ}舜^{ゆき}の居^ぐは三年^{さんねん}にして都^とをなし、仲尼^{ちゆうじ}の政^{まつりごと}は朞^き月^{げつ}自^{みづか}ら治^{をさ}るとは、今此時^{けいし}よ武將^{ぶしやう}の中興^{ちゆうかう}、源^{みなもと}の朝臣^{あそん}頼朝^{らいしやう}卿^{けい}、順^{まつろ}はざるを禁^{いまし}め賞罰^{しやうばつ}を糺^{ただ}し、絶^たえたるを繼^つぎ廢^ふれるを起^{おこ}し、民^{たみ}を安^{やす}んじ衆^{しゆ}を和^わす。七德^{しちとく}八教^{はつかう}谷^や七郷^{しちかう}、賑^{にぎ}ふ民^{たみ}の鎌倉^{かまくら}御所^{ごしよ}、大藏^{おほくら}の郷^{かう}に營居^{えいきよ}有^ある。さしもさばかり手強^{てこは}かりし、木曾^{くわんじや}の冠者^{くわんじや}義仲^{よしなかつ}は、江州^{かうしやう}粟津^{あはづ}の泡^{あわ}と消^くゆ。平家^なは亡^なき名^なを文字^{もじ}が關^{かん}に残^{のこ}し、治國^{ちこく}泰平^{たいへい}天下^{てんか}の功^{こう}古今^{ここん}に秀^ひで、未^なだ家^けに先蹤^{せんじゆ}なき大納言^{だんなごん}の大將^{たいしやう}、六十餘州^{そうつふし}の惣追^{そうしゆ}捕使^{ほし}、日本^{にっぽん}弓馬^{きうば}の棟梁^{どうりやう}と成^{なり}り給^{たま}ふこと、併^ひし佛神^{ぶつしん}の擁護^{ようご}なりと、神祇^{じんぎ}を禮^{らい}し百靈^{ひやくれい}を懷^{なつ}け給^{たま}ふ餘^{あま}り、秩父^{ちちぶ}の庄司^{しやうじ}重忠^{しゆうしゆ}を以^{もつ}て、さいつ比^{ころ}より南都^{なんど}東大寺^{とうだいじ}大佛殿^{だいつとん}を再興^{さいかう}あり。既に伽藍^{がらんじやうじゆ}成就^{じゆうじゆ}せりと、本多^{ほんた}の次郎^{じやう}近經^{きんかう}を以^{もつ}て訴^うたふれば、根井^{ねゐ}の大夫^{たいふ}稀義^{まれぎ}、岩永^{いはながき}左衛門^{さゑもん}尉^じ致連^{ぢやうれん}、其外^{そと}當日^{たうじつ}の諸役人^{しよやくにん}、膝^{ひざ}を屈^{くつ}し相詰^{あひづめ}めらる。陪臣^{まいしん}なれども本多^{ほんた}の近經^{きんかう}、召^めしによつて百分^{ひやくぶん}一^{いつ}に寫^ひせし伽藍^{がらん}の繪圖^{えづ}、御座^{ござ}近くしつらひ掛け、佛閣^{ぶつかく}の高廣^{かうかう}莊嚴^{じやうげん}の次第^{しだい}、外^しに記^しし捧^たぐれば、逐一^{しゆくいち}に上覽^{じやうらん}

有り。「重忠は佛智にちひしか、我が思ふ如く造進せし條、嬉しや解脱の善根を植ゑたり」と、御嬉しけに見え給へば、近經はつと恐入り、「こは冥加に餘る御詞、主人重忠造營の功を得たること、偏に君の洪福によつてなり。太政入道清盛は、伽藍を焼いて衆類を族滅す、君は伽藍を再興有る、天地懸隔の違、恐れながら御子孫の繁榮極あるべからず。鎮護國家の御基、此上や候ふべき」と、祝し申せば一同に、皆萬歳と壽きける。大奥の間の廊下口、鈴の綱音なひて、重忠の奥方玉房御前、御座の間近く手をつかへ、「誰ぞお取次」と伺へば、頼朝御覽じ、「珍らしや秩父の妻女、くるしからず直に申せ、何事ぞ」と御説有る。「いやお願は私ならず、御臺様の御使、只今奥にて承れば、此度の大佛供養、かねて君御上洛との御事、御臺様も御参詣有るべき御立願、くるしからずば御一所に、御上洛遊ばしたく思召し候へば、伺ひ奉れとの御事なり」と述べにける。頼朝打領かせ給ひ、「今四海一統すといへども、木曾が餘類平家の殘黨、義經錦木戸が打洩され、隙を窺ふ此時節、迂濶に鎌倉は明けがたし。我は皆成就の後上洛すべし、此度は政子ばかり上洛し、供養を遂げ給へと申せ、さあらば玉房付添ひ用意せよ」と、御返答有りければ、玉房悦び、「是はくお嬉しや、御臺様も嘸ぞ御機嫌、お悦び申す爲」と、勇みて奥へ入りにける。頼朝重ねて、「如何に根井大夫、岩永左衛門、兩人共に政子が供し

上洛し、萬籥忽なき様に、心を合せ計らふべし」と宣へば、根井ははつと當惑顔、岩永左衛門進み出で、頭を下け、「聊御説を背くには候はねども、かゝる目出たき御上洛に、臆病の飛汁掛つたる老人と相役仰付けられ、心を合せ供奉仕らんこと、身に取れて不祥の至り、此儀は餘人に仰付けられ下されかし」と、根井の大夫を尻目に懸け、憚なく言上す。根井の大夫氣色を損じ、「ヤア口荒涼なり岩永殿、あつと申さうや否と申さうや、未だお請もせざる内、臆病のとはしり掛つたる老人と相役、不祥なりとの言上、オ、推したり、我娘白梅を婦妻に所望ありしかども、愛甲の前司太郎が子を養子聲の契約せし故、承引せざるを憤つてのわんざん卑怯至極」と、はつたと睨めば、「ヤア左様の私の宿意を以て、御用を妨ぐる岩永にはあらず、何と成りとも言はと言へ、臆病者の相役には、得ならぬく」「オ、それも推したり、彼悴相州箕尾谷村の谷陰深く生立ち、熊猪は猫の鼠ともてあつかひ、かたの如くかけ烏などはすれども、未兵法の奥義を知らず、弓矢鍛錬の後家を知るべしと、武者修行に出で、過ぎつる源平の戦、義經公の御手に屬し、實父愛甲の名字は勿論、我方へも未だ來らねば、根井とも得名乗らず育ちし箕尾谷村の在名を取つて、箕尾谷四郎國時と名乗り、「平家の侍上總の七兵衛景清に出會ひ、少し汀へ引退きしを、引く矢不鍛錬の者共が、臆病なりと取沙汰を聞き誤

つての思ひ違ひ、をかしとく」といはせも立てず、「オ其戦ひは壇の浦、船と陸との詞戦、俗にいふ川向の喧嘩にひとしく、箕尾谷四郎廣言放つて居たりしが、兵船一艘漕ぎ寄せ、上總の七兵衛景清とをめて駈く、始の詞には似ざりけり、かい振つて逃けて行く。景清長刀押取りのべて討つならば、眞二つに成るべきを、能くくの臆病者、刀物汚し、なぶり物にせんとや思ひけん、長刀小脇にかい込んで、箕尾谷が著たりける、兜の鍔を取りはづし、てんがうまじくら無手と抓んでうんと引く、身を遁れんと前へ引く。互にえいやと引く力に、鉢付の板より引きちぎつて、輾けつ轉びつ口減らず、去にても汝恐ろしや、腕の強さと云ひければ、景清は又箕尾谷が、首の骨こそ強けれど、敵も味方も物笑ひ、なんと臆病者で有るまいか」と、嘲笑へば膝立直し、「其時の軍奉行は土肥の眞平、箕尾谷は大太刀、景清は長刀、手を碎いて戦ひしが、何とかしたりけん、箕尾谷太刀打折つて力なく、少し水際へ引き退く、臆したるにはあらざる故、御帳面にも其通り、記したりとの物語、御帳面が證據よ。但し貴殿は左様の時、太刀打折つた軍は是まで、サア首きれとて切らするか、蒐るも引くも軍の習、畢竟の勝を克と云ふ、殊に景清世に存へ、君を狙ひ奉る風聞有り。吾侪又景清を附狙ひ、恥辱を雪ぐまじき物ならねども、それは後の沙汰、必々今の詞忘るゝな岩永」と、包む無念の目に洩れて、こほ

るゝ涙を袖に隠し、御前に向ひ、「先年系圖に書きのせ、上覽に入れたる忤行方知れず、不奉公者の親として歴々に立交り、座並を穢する恥かしきに、況て御臺所の御供恐少なからず、御説違背仕るには候はねども、此儀は餘人に仰付けられ、某は本國に浪人の願、所領を差上ぐると申すは冥加なし。忤が安否を承はり届くるまで、暫く預け奉り度く存候」と、恐入つてぞのべにける。賴朝始終を聞召し、「子によつて親々の名をも上ぐるに、老人のこゝろづかひ不便なり。上洛の供を赦し、望みの如く、所領を預り置く上は、返すことも亦望みによるべし。浪人の住所は心の儘、勝手次第逼塞すべし。本多は後備へ、岩永は上洛の先手に進み、直に都にとどまり、重忠に加はり、萬事沙汰せしむとも、指圖に背き、我意の仕方有るべからず。就中上總の景清は、平家無二の忠臣、國士無雙と聞く、あへなく討たんも殘多し。兎も斯うも重忠と計ひ、穩便の沙汰あらまほしけれ。心得たるか岩永本多、罷り立て」と、簾中深く入御成り給ふ。佛法王法此君より、再び榮ゆる秋津國、盡きぬ恵みぞ 三重。月日立つ、春も漸くをはりの國、夏になるみや熱用の宮、聞えは人の國までも、隠れな高き御神にて、萬の願取分けて、惡氣厄難災難を、祈れば奇特をみやつこの、散敷く花を搔寄せて、神の御庭の朝清め、散残りたる木末より、土に春有る風情なり。春の旅、暖ならず寒からで、思ひ有る身も折々は、心

を開く白梅は、父に誘はれ古郷を出で、先は近江の長濱へ、長道中を是ぞ此の、尾張の熱田と聞くからに、態とも參らまほしかりし、いざと付々お供にて、乗物つらせ參詣有る。「やい皆の者、此お社こそ、楊貴妃の所在を尋ね、唐土の方士が渡りし常世の島、蓬萊山とは此處ぞかし。奇瑞尊き御神様、皆信取つて能う拜みや。それに付き、此お社の禰宜の娘は、景清が妻なれば、此處に隠れ忍び居まい物でなし。我夫の箕尾谷殿行方知れず、親子夫婦の名は有りながら、得逢はぬも又父様の、知行差上げ住みなれし、鎌倉を立退いて此の如く、旅他國なさるゝも彼が所爲、景清と見るならば、搔きむしつても恨いふ心、其時は誰々も、力を付けて頼むぞやいの」と宣へば、乳人の澤田が、「御尤々々、此人衆が一口宛喰ひ付いても、景清の一人や二人お氣遣ひ遊ばすな」と、力を添ゆれば、「オ、嬉しいく、大宮司と問へば隠れないとや、住家は何處、誰に尋ねうぞ。あれく彼處に人こそあれ、大儀ながら乳母問うて見や」「何の大儀」と立寄つて、「是れ物問ひましよ、禰宜殿なれば知つて有らう、大宮司殿は何處ぞ、教へて下され」「ムウ扱は旅のお人か、大宮司と申すは我々がお頭殿、今では二人有る御子息は、夏茂様とて今の代取、社の後な大門作りがそでござる。親御は通夏様、近年隠居なされ、海山を見晴して濱面に館を建て、衣笠様と云ふ娘御と一所に、あれくく、あそこへ白髪

まじりの惣髪、大小差いて、女中が一人付いて見える、あれが通夏様衣笠様、社々拜なされ
て、頼て此處へ」と教ゆれば、「お姫様聞いてか」「聞いたく、願うてもない首尾、待請け
て詰開かう、ヤイ下々も乗物も、鳥居の外に待つて居よ。父様お見えなされたら、此處にと
申せ。未だ見えるには間も有らうが、其間に、自もいざ神前へ」と引きつれて、「禮言はせ
詣でらる。春色花漠々たり、鶯の百囀、擯俗の地無何の郷、心自得すれば、壽疆なしと口
吟んじ、娘を侶ひ、花に誘はれ浮れ来る、前の大宮司、「掃除は誰ぢや、福太夫か、此頃逢は
ぬ、變ることもおりないか」「アイや別にかはることも、それよ、たつた今旅の女中が、二人様
を尋ねて參られ、追付け此所へお出でなさると申したれば、其間にお宮へ參つて來うと云う
て往たが」「ハテ誰ぢやな、見えたらば逢ふまでよ、休めく。身は折ふしの他國あるき、近付
も有る、尋ね來まい物ならず、娘を尋ねて來る女中は、ハテ誰ぢやな」「いや私でござんす」と、
立出づる白梅、「イヤこなたなれば猶見知がない」と、親子いぶかる許なり。「そなたに御存じ
なされいでも、此方は景清殿と譯有る中、お前の方に忍び有ると、折々の文玉章に、お二人の事
能う知つてゐる。久々顔も見ぬ故に、はるく尋ね參りたり、早う逢はせて下さんせ」と、心
せかせてうら問へば、父は驚く衣笠は、惡う吞込み早合點、「其景清殿連れてござんせ逢はせ

う」と、愛想あいそなけれど云いひ懸かり、「衣笠ひさ様そりや卑怯ひけふな、慥たしかに此處こゝに居る人を、連れて來こいとは、こりや悋氣りんきでござんすの」「オ、好がい合點てん、さつきにから此胸このむねの内、くらゝとにえかへる、本の妻ぢやも悋氣りんきせいで、とても悋氣りんきと見らるゝからは、逢あはせまふことふツつりならぬ。詮せんないことに隙ひま入れずと、往いなしやんせく」「ムウそんなれば景清殿は、實正じつしやう構かうて置かしたの」「ハテ入らぬ念を入れる人、夫そが女房むすめと一所に居るが珍らしいか」「いや珍らしいうはない、其一言そのいちごんを聞かう爲ため、サア女子共合點そなごどもか」「心得こころえました」と一樣いちやうに、隠ひそし差さしたる一腰ひざしの、鐙つばを鳴なして聲々こゑ々に、遁にしはやらじと詰つめかくる。大宮司娘おしきを押圍おしかこひ、「ヤア誰なれば女をんなのざいに此の體ていは興きがつたり、遁にけ走りする我々ならず、仔細しさいを語かたれ、名なを名乗のりれ」「ヤア小癪こしやくなこと云はずとも、景清を此處こゝへ出しや、其上では言いやらいでも名なを名乗のりる」「それは無體むたい、景清は三年この以來こたありか所在そこを知らず」「いや知らぬとは云はせぬ」と、爭あらそふ半なへ根井ねい太夫たふ走り著しき、娘むすめを制しし、附々つづを押沈おしづめ、「大宮司通夏いごまと云ふは御邊ごへんよな、我等われらは根井ねいの太夫稀義まれぎと云ふ者、是は我が娘、此度このたび鎌倉かまくらをお暇いごま申し江州えしゅうに蟄居ちつきよする、其儀は云ふに及ばず、過すぎつる源平八島の戰たたかひ、和主わぬしが聳上じこ總そうの景清、箕尾谷みおのや四郎しろうと合戰がくせんの勝負、それも聞き及ばん、其箕尾谷みおのやと申すは某そのみが養子やうし聲こゑ、是が夫、其場の恥辱ちじよく面恥つらはづかしくや思ひけん、今いま以て行方ゆきかた知れず。夫そを思ふ女心、景清に遺恨ゐこんを含ふくみ、今

日此所通行せしを幸ひ、景清は和主が聲なれば、隠し置かんと我にも知らせず此仕儀に及ぶ、殊更景清、我君頼朝公を狙ひ奉る御敵、かたぐ見遁しては通られず、隠して館を捜されば、大宮司の浮沈たるべし、サア景清を出されよ」と、退引させず詰めかけたり。「ム、扱は聞き及ぶ根井の太夫殿よな、最前御息女、景清の妾なりと偽りも、問ひ落さん爲とは知らず、娘は恪氣に取込み、拙者は却て御息女に、景清が所在を尋ねんと存する所、いやはやこちらあちらの仕合、長々返答申すも旅行の妨、手短に申さう、平家の一門滅亡の後、景清はかた切つて参りもせず便もせず、此方の娘も懐しがり、若し在り所聞出されば、お知らせに預りたし」と返答す。「オ、一旦の陳じは尤、能く分別して見られよ。一樹の蔭の雨やどり、一河の流を汲んでさへ、人の情は捨てられず、況んや多年の娼舅、女房を預くる程の景清、便もせず参らずといふとも、誰か左あらんと思ふべき。鎌倉殿御不審のかゝらん時も、其分疏で済むべきか、よい仕合で歴代の神職没收せられ、子供の流浪笑止々々、此理を辨へず隠し通すか、根井の太夫悪い癖あり。斯様のこと詮議しかより、云はずば可しとて搔い遣りには捨て置かず、館を捜さうか、但は隠し置かず、存ぜぬと言ふ證據、當社明神は云ふに及ばず、天神地祇を驚かし、誓言立つるか、二つ一つの返答あれ、大宮司」と些つとも心赦さぬ面色、大宮司横手をはたと打ち、

「ハア御疑御尤誤り入つたり、根井殿、聲の不便も娘の可愛さ、子供等が流浪に換へ、所領に換へ、何しに包み申すべき。ア、淺ましや、神に仕へても凡夫心、今日のことを知らざりし。平家の一門都落の時、此娘景清と一所に落行かんと云ひしを、船に浮き波に伏し、憂き目にあはん不便さに、預けんと云ふを悦びて預りし其時、夫婦の縁切らせて、預かるか取戻さば、今の疑は受けまじきに、好い年をして智慧なしと、根井殿は笑ひ給はん、恥かしや面目なや」と、はらはらと翻ると涙を押ゆれば、「なう私も西國へお供せば一思ひ、なま中に預けられ、夫は生きて有りながら、二年三年便りもなく、捨てられし我が命、惜しいではなけれども、若しやと卑怯な心から、段々御苦勞させまする、赦して下され父様」と、がつぱと伏して泣き居たる。「娘泣くな分別有り。なう根井殿、我先祖は尾張の國の造、明神を戴き祭りて千百年、假にも曲らず偽らぬ、誠を以て仕へし身の、大凡俗と等しく誓言立てんは、口惜しとは思へども、恥も人目も子供等には換られず、只今誓言立て申す、疑惑の念をはらひ給へ清め給へ」とつい立上れば、「ア、暫く」と根井の太夫、走り寄つて抱き留め、「よしなき所望誤つたり、もう誓言に及ばず、今の悔の御一言、我心魂を貰いて、貴殿を疑ふは神を疑ふ勿體なし。とかく長居も神慮の恐れ、早速ながらお暇申す」疑晴れてござらうか」参るく大宮司殿、再會必ず期あ

らん」と、娘々も笑顔を作り、「随分御無事で」「御達者で」「おさらば」「さらば」と立隔つ。
唐土人も仲鷹の、歌をしるべにふりさけて、今や見るらん春日なる、御笠の山にいづる月、
空も五つになる鐘の、世上に響く東大寺、大佛供養も今日明日と、諸國の人の參詣を、待つや
町筋狭しとて、山門の片邊、取茸屋根に置く露に、月の光も澄める茶の、暖簾の紋は釜敷に、
土竈の煙絶間なく、買うて行く人賣る人は、女主の顔貌、むつくりとして味さうな、蒸し立
饅頭買はしやんせ、世間に類は多けれど、歌には青丹よしと詠み、奈良饅頭の餡もよし、殊更
神の御誓ひ、慈悲饅頭の蒸しは、御笠の山に咽が鳴り、五重甕に立つ湯氣に、春日の里は
賑へり。こゝに平家譜代の忠臣、上總七兵衛景清、薩摩五郎信忠と云ふ者有り。一門御落命の
折から、ともかうも成るべき身の、生は難く死は易し、長生して主君の仇を報ぜんものと、山
林に身を委ね、時節を窺ひ居たりしが、今度大佛供養の爲、頼朝上洛と仄に聞いて、心を合せ
隠れ家を、るでの玉水日は暮れて、急けど初夜になら坂や、饅頭賣る家の床几の端、暫し御免
とたとずめば、「是は何處より御參詣なされしぞ、夜に入りて御苦勞や、緩りとお休み遊ばせ」
と、挨拶片手に煙草盆、「お二人ながら酒のなりそな御風俗、お嫌かは知らねども、所の名物、
お慰に」と差し出す、饅頭より先づ女房の、笑顔で一口喰はまほし。景清は只一心に、術を工

夫し返答せず、五郎店借る追從に、「尊い寺は門からと申すが、そもじの風俗で饅頭の味も思ひやられた。見れば暖簾にも行燈にも書いて有る、家名は十一屋か、此心推量致した。饅頭を十買へば、一つ添ゆるといふ心で、十一屋と付けたのか、さうかく」「眞に是も好い御推量、成程左様と申したいが、此方の心は左様でない、朝七つから店出して、夜の四つに店仕廻ひ、七つと四つの時を合せて、十一屋と申します」「是も尤、頼朝上洛召されしと聞く、付々も嘸ぞあらん。其外の參詣諸國の入り込、左程精出さいでは賣り届くまい。なんと斯程結構に諸堂廻廊以下再興し、肝心の此山門ばかり残したは、心有つてか但しは始末か、音に聞いた程にもない、頼朝は吝い奴だ」と打笑へば、「いや、此山門は其昔、聖武皇帝様と云ふ王様の御建立なされたを、平家の惡坊主清盛入道が、此大佛を焼いた時、残つたは此山門ばかり、能登守教經と云ふ大惡人が、大佛様へ射懸けた矢が反れて、此山門の垂木に當つた、矢の根矢殻が今に在る、晝能う見さしやんせ。如何に怖い者が無い、惡事が仕たいとて、日本第一の佛様を焼きくづすと云ふやうな惡人が、ま一人と有らうか。佛ばかりか彼の堂では、五百人八百人、此堂では千人二人、人ばかりも四千人程焼殺した其報、火付の大將頭中將重衡、京鎌倉を引渡され、果は衆徒の手にかゝつて、七日暴され首切られた、其跡が山門の脇に在る、これも明日見さしや

んせ。左様に段々と悪行の積りつもつた果は、平家の今の態、主にも家來にも、頭を差出す者一人もない。此山門に手も付けず、其儘残し置かるゝは、末代平家の惡逆を、人に知らせて嗜ません、世の見せしめぢやとの物語、私が様な何にも知らぬ者でさへ、尤さうに存じます」と、それと知らねば女の口、齒に衣きせぬ長咄、餘所に聞きなす景清が、本意なさ悲しさ口惜しさ、胸も碎けるばかりにて、忍び涙にくれければ、なま中のこと問出して、五郎も返答あぐみはて、「得て過ぎた事には、かならず付けつ添へつが有るもの、なんの平家ばかりがさう惡うも有るまい」と言消せば、「いえく此様な事ではない、まだ大それた惡事が有る、咄しましよ」「いやもう承るに及ばぬ」と、聞かぬ先から耳驚かす四つの鐘、響き渡れば、「あれ四つが鳴る、店仕廻ひ時、各様も宿取つてお休みなされ、其處退いて下さんせ」と云ふを幸ひ、「過分」と立退けば、土竈に水打ち行灯消し、道具一つも取直さず、側への葭簀さらくくと引廻せば、五郎見かねて、「是女中、土藏へ入れた物を盗み取る世の中、それは近頃不用心、まそつと念を入れて置かれよ」と氣を付くれば、「いえく、盗人の徘徊したは平家の代の時、今の源氏の慈悲深い靜謐な世に、そんな氣遣ひ些つとも無いこと、戸ささぬ御代とは今の時代でござんす」と、口も手元もしゃんくと、仕廻ひて別れ立歸れば、よしないことを又言うて、一度の恥に二度

の口、塞ぎかねてぞ見えにける。景清五郎をかたへに招き、「聞かれたるか五郎殿、賤しき女の口すら斯の通りなれば、御一門の身の上を、世上の嘲弄思ひやる、主君の仇を報ぜんと、死すべき命を存ゆれば、死に増る恥を聞く。此山門に鎌矢幹を其儘置いては、末代平家の譏を残す、頼朝を討つは、是を取捨てゝ後の事とは思はずや」と嘯けば、「實もく、口づから傳はることは中絶する折もあり、直に見するは情なし、というて夜の手業には取捨ても成るまじ。人間を窺ひ晝のこと」と、云はせも立てず、「ヤアまだるしく、一心の眼力を以て搜さば、眞の闇も晝同然、幸ひ人も靜つたり、御邊の足首をつかんで差上げば、門の冠木に手は届かん、それを傳うて二階へ上り、垂木を一々探して見られよ」「なう其段は御免あれ、御存じの我等眩暈病み、高い所へ上れば、忽發る、地の上の働きは、何なりと指圖には背くまじ。ア、聞いてさへふらくくと、目が眩ふやうな」と頭を抱へ、胸押撫つれば、「よし／＼人は頼まじ」と、草鞋ぬぎ捨て身を固め、柱を傳ひ上らんと立寄る所に、上り大路の松蔭より、人聲足音高提灯、見え來れば、「折あし、なう五郎殿、やり過し後又こそ」と打つれ木蔭に忍びける。山門の内より只一人、長刀を杖につき、のつさ／＼と來る大衆、雙方行逢ひ、それと見るより、「ハア岩永左衛門殿候ふな、御家來にも仰付けられず、御大身のかろ／＼しく、御自身の御勤御苦勞なり」と挨拶す。

「オ大日坊か、身は御臺所の旅館へ參上し、只今退出申す、夜中只一人何方へ參らるよ。元來和僧は平家の譜代、上總の忠清が弟、景清が叔父なれば、我君のさす敵、疾く誅せらるゝ筈の所身が取持ち、兄弟共不通致し、只今は平家の由縁なし。御疑はるゝ程の御奉公申上げさせんと、請合つて繋いだる首、何が打捨て、平家の餘類を尋ね、一手柄無うては、此左衛門まで虚言者に成る、随分心がけめされ、ヤ其に付け和僧の甥の景清、存へて此世に在り、及ばぬ仇を報ぜんなどと、かやうの時節心懸け、和僧を頼み來まい物でなし、さあらば快く頼まれ、潜に知らされよ。討つてなりとも搦めてなりとも、岩永が高名にせねば、武士道立ちがたし。其遺趣は、景清に遺恨はなけれども、箕尾谷の四郎と云ふ者、景清を付け狙ふと聞く、其箕尾谷に討たせては、根井の太夫が娘を我手に入ること叶はず。景清を我手で仕廻ひ、箕尾谷にも鼻明かせ、根井が娘を我手に入れたさ、事を分けて頼み申す、合點か」「是は何より安い御用、些つともお心苦しめ給ふな。かやうな御用有らうとは存ぜず、我等が高名に仕らんと、工面致し置いたれども、其許元へ奉る、安堵なされ」と、懷中の一通取出し手に渡せば、「提灯もて」と火影に照し、見ては悦び讀んでは領き、戴いて懷中し、「出來たく御坊過分、委細は其時、さらばく。提灯參れ」とゆふ露の、草踏散らし通りける。後に立ちて景清は、始終とつくと

聞きすまし、立出で、「貴僧は大日坊にて渡らせ給ふな、我こそ只今岩永に頼まれ給ひし、上總の七兵衛景清」と、聞いて俄に仰天顔。「イヤ驚き給ふな、悉く承はる、岩永に御返答は間に合せの偽か、眞實の御所存なれば手は見せぬ。御出家と申し、叔父甥のよしみを存じ、下手くろしう念に念を入れ申す」と、云はせも立てず、「扱々面目ない、佛祖冥理、いまの返答が眞實でたまる物か、否といへば即座に命をとらるゝ、それ悲しいではなけれども、存へて善果を積まん爲、間に合はせともく、御一門の滅亡聞くとひとしく、案ぜしは和殿が事、健固の對面満足せり。今宵此處へ來りしは、深い願ひ有つてのこと、打明けて語られよ、何れの道にも疎略なし」と、無二の詞に心解け、手をつかへ、「貴僧の爲にも平家は主君、たとへ出家の御身なりとも、敢なく頼朝に亡され給ひし鬱憤は残る筈、あはれ景清に力を添へ、頼朝が假屋へ忍び入る、手引をなされ下され」と、思ひこんでぞ頼みける。「オ、易いことく、手引せん」と拔打に、はつしと打つをひらりとかはし、其手を取つて引つかつぎ、大地へ挫と打付け乗懸り、「ムウ叔父ながら實の入つた惡人ぢやの、懸替もなき弟の儕を勘當なされ、追拂はれし我親の忠清殿は目水晶、ヤイ親程こそあらずとも、景清が底の根性見ぬくまいか。最前かくと知つたるゆゑ、眞二つにとは思ひしが、叔父は親の孝も有り、禮義も有る、とかく云ふ中心を翻せば、

互に主君の御爲と、堪忍せしももう是まで、観念せよ」と挫ぎ付く。「ヤア待て景清、些つと緩めて言ふ事はせい。儕叔父を殺したらば、じうらいが好う有るまいぞ。近い證據は左馬頭義朝が子の源太義平、叔父帶刀先生義賢を殺した故、惡源太と異名を付けられ、六條河原で首斬られしを知らぬか。儕も我を殺したら、惡七兵衛と笑はれん、能う分別せよ」と減らず口。「オオ惡七兵衛は惡の事、鬼七兵衛、蛇七兵衛とも言はど言へ、何ともない」と腮に手を懸け、首捻切らんとする所を、薩摩五郎飛んで出で、利腕取つて引きのくれば、隙をあらせず大日坊、弓手の腕しつかと取り、うんと聲かけ景清が、兩手を二人が土に捻伏せ、「やい景清、いかに二相を悟るとも、薩摩五郎が此體は、合點が行くまい。大日坊と某、終に對面はせぬとも、書狀を以て牒し合せ、此度の大佛供養を幸ひ、頼朝を討たう、いざ往かう」と某が進めたは、頼朝を討つではない、儕を先づ斯うせん言合せ、深い工思ひ知つたか。なう大日坊、我が出るを待ち兼ねたで有らうの」「待ちかねた段ではない、景清が名を聞き、貴殿も御出とは知つたれども、顔見ぬ内は幾瀬の案じ、書狀も岩永の御目につけ、見え次第同道申す筈、幸ひの土産、サア繩打つて連れ行かん」「尤」と、腕捻廻すにちつとも動かず、景清くつくと吹出し、「もつ吐かすことそれまでか、死人に成つて物は言はれぬ、言うて置けく」「ヤア死人とは誰

が事、言ふことももう無い」と、汗水に成つて身を悶く。「言ふことなくば是れ見よ」と、左右を一度に腕がへし、ころ／＼轉び打ちながら、「生擒には叶ふまじ、首にして連れ行かん」と、拔合せ、挟み立てゝ切りかくる。得たりや應と渡り合ひ、互に磨きし刃の光、月に嚙く春日野の、飛火を散して切りむすぶ。大日坊が頼、願、願かけて切付くる、其太刀風に薩摩五郎、一人立では叶はじと、跡をも見ずして逆失せける。「エ、大腰脱け奴、討ちもらせし腹立」と、大日坊に乗りかゝり、吭のくさをぐつ／＼と、突きならす鐘の聲、「一イニウ三イ四ウ五ツ、早七ツか、ハツ九ツも我耳へは入らざりし」頓て店出す饅頭屋が、葎簀の蔭に忍び居て、疾くより窺ひ見るとも知らず、衣引剥ぎ袈裟もぎ取り、ずんほろ坊主に剥ぎむくり、一色残さず搔抱き、死骸を蹴散らし忍び行く。叔父の首切る其のかはり、名字の上總も言切つて、惡七兵衛景清とは、此時よりぞ申しける。女房葎簀を跳り出で、「扱こそく、景清と見た目は違はぬ、君を狙ふに疑ひない。斯う云ふ内も御臺様の御前が氣遣、假屋へ往かうか、但し夫に知らせうか。いや景清が落先を、見届けて置くが肝心關門、饅頭屋が蒸立見よ」と慕ひ行く、餚もよし又思案よし、健氣成りける三重。春日山、鹿立つ峰の朝風に、敵の榮華や散りぬらん、上總の七兵衛景清は、今度の供養に頼朝を、討つて濛霧を散ぜんと、扮装つ衆徒の似姿、素肌にきたる伏繩

日、しけ金物の大鎧、草摺長にざつくと著、上に衣の玉襷、袈裟を結んで鉢巻し、敵を冥途へ送りやる、十王頭の脚常に、我身を守護の毘沙門小手、重大の痣丸、脚緒長に結び提け、跡に續きし女房の、心しめたる高褰け、油斷せぬ氣は一腰の、鯉口早く抜きかけて、附き従ふともしら柄の長刀、小脇に搔込み見渡せば、廻廊諸堂ことごとく、家々の幕兵具を飾り、警固厳しく見えたりける。音せで通らば悪しからんと、所々に大音上げ、「警固怠り給ふな」と、呼はつて駈通る。此處ぞ頼朝の假居と思しく、襞白の大幕、風に靡いて優々たり。「サア仕おふせし嬉しや」と、のツさのツさと歩みしが、「いやく内も用心さぞあらん、千里の馬も躓き、悔つて不覺をとらば一期の瑕瑾、不敵達は無益ぞ」と、汀のさきの小鮎を覗ふ忍び足、「待て」と一聲かけければ、さしもの景清悔りし振返る。「なう肝の太い景清、我君を討たうとは、温か饅頭屋の女房と思やつたら、餡の外の食ひ違、誠は本多の近經が妻の唐綾、夕べ逢うた覺えてか、一寸も奥へは遣らぬ、返せく」「ヤア小癩なり、女相手にする景清ならず、すつ込んで居よ」と取合はず。「いやく、其方にせいでも此方に成る」と、ずはと抜いて打懸る。詮方なぎなた取直し、鐔にて受けながし、結んづぼどいつあしらへども、女に奇特の太刀さばき。「ヤア隙入る、面倒なり」と鐔取りのべ、ぐつとあてみに本多が妻、眩暈いてたちくく、打ち

すて歩み行く先の、幕をひらりと押上けて、袈裟漏るゝ押取刀、秩父の奥方玉房御前すつくと立つ。思ひ懸けなく景清は、又びつくりして立ちとどまる。「ヤア／＼唐綾、誰を見て景清呼はり、其景清どれ何處に」「ハアそれこそ」と教ゆれば、「いや／＼是は所の衆徒、あの扮装が唐綾目にかよらぬか。景清ならば平家に取つても、仁義を兼ねし勇者と聞く、我君を狙ふとも、尋常に名乗りかけ、神妙の働こそ有るべけれ。卑怯なさもしい姿を變へ、女計の此假屋へ、大人氣無う何んと來られう、必粗忽言やんな。是れ坊様、今度の供養に頼朝様は上洛なされず、此處は御臺所政子様の御假屋、坊主の來る所でない、歸らしやれ／＼、但し方角に迷うてか。ヤア／＼大衆の馳走人、本多次郎近經道しるべせよ」と有りければ、はつと答へする／＼と立出で、「筒様の御用も有るべきかと、疾くより木陰に待受けたり。我等本多次郎近經、頼朝公の御説を請け、大佛供養の内、大衆方の御馳走、又猥なる仕方あれば、禁めも我等の役、方角に迷うての推參ならば道の案内せん、狼藉ならば計らふ旨有り、サア返答を承らん」と、空知らずしてにぢりかゝれば、「ヤア忌ま／＼しい何の坊主、姿を變ゆるは一旦の計略、頼朝を討つに二つはない、上總の七兵衛景清見て置け」と、頭を包みし袈裟かなぐつて捨てければ、扱はと二人の女も詰めかけ詰めかけ、眼に氣を付け油斷なし。近經しばしと奥を諫め、女房を制し、

「ヤア景清、我君を平家の仇、主人の敵と狙ひ奉るは、以ての外のひがごとなり。太政入道朝恩を忘れ、やゝもすれば天子を惱まし、民を苦しめし其積惡、後白河の法皇院宣を賜はり、平家を亡ぼせよとの勅諭なれば、平家の敵は身の奢り、我身を我身の敵とは知らざるか。良禽は木を見て栖み、忠臣は君を選んで仕ふ、心を悔め只今より、頼朝公に奉公せよ」と呼ばれば、「ヤア頼朝に奉公せよとは何んの囁言、一言と吐かば捻り殺してくれんず」と頼断をなし、「エエ口惜しや今度の供養、頼朝上洛したれども、斯く云ふ景清を初め平家の餘類を恐れ、御臺と世上へ思はせん爲、態と女輩を召連れたりと、薩摩五郎が注進を、彼が我を誘出す計略とは心付かず、嬉しや大意を達せんと、忠を一途に姿を扮し忍び入り、由なき骨を折つたよな。景清が心ざす敵は頼朝一人、臆病風引込んで、鎌倉に隠れ屈めば力なし。女輩本多風情、五萬十萬切つて罪作り、本望のはの字にも届かず、先此度は返るく、時節を待つて、頼朝が頭は景清が手裡に在り、かねて名残を惜しんで置けと傳へよ」と、しんづくと立出づる、所へ手の者引具し、岩永左衛門哄と押寄せ、「ヤア不甲斐なし近經、景清を何故返す、手に餘らば左衛門が受取つた。薩摩五郎は無きか、あれ討ちとめ」と呼ばれば、本多は左衛門に打任せ、皆々制して假屋に入る。身輕に扮装つ薩摩五郎、飛んで出で、「なんと景清、五郎が計略段々とこた

へるか、我等岩永様の御蔭にて、行にも召し付く筈、羨ましくば降参せよ。傍輩のよしみ、取次いで得ません」と罵つたり。景清眼を赫と見開き、「逢ひたかつたに能ううせた、儂ばかりには殺生も佛も入らぬ、手並は豫て知りつらん」と、大白黒氣の其勢ひ、長刀柄長く押取りのべ、微塵になさんと渡り合ふ。百獸の洞の内、獅子の暴れたるごとくにて、はらりくと薙ぎたつる、其勢ひに岩永左衛門、人一番に逃げ失せたり。主人が逃げれば手の者共、影さへ見せぬ其中に、五郎一人が勝手は知らず度に迷ひ、狼狽へ廻るを引捉へ、「せんずやうもなき人非人」と、大地にぶち付けしつかと踏まへ、一捻ねぢてぐつすりと、首引抜いて突立上り、見れども假舍靜まつて、手ざす敵もなかりけり。よし／＼今度は遁すとも、我が見込んだる一念力、岩にも入り雲にも乗り、鎌倉山に籠らば籠れ、山を劈き岩を破り、終には本意を達せんものと、長刀小脇に搔込んで、しんづくと出でて行く。道狭からぬ天が下、敵を助くる仁者の道、古主を忘れぬ義者の道、歩むも道の道ながら、誠の道は世々にひく、弓矢の道をしるべにて、行方定めずなりにける。

清水や、大慈大悲の眞如海、誓ひを結ぶ御縁日、其佛閣の下河原、菊水の邊の辻講釋、漢楚軍談三國志、講師關原甚内と、紙に記し柱にかけ、紙子の長も行き詰りし、浪人らしく一腰ほつ込み、聽衆を引き受け見臺にかより、本引き開き素讀する。「此時漢王自ら丞相府に到つて迎ひ給ふ、大將軍を見れば韓信なり、樊噲色を失うて、御車の前に拜伏して申しけるは、韓信は漂母の食を乞ひ、市に胯をくどりし者なり、今大將軍に拜し給はゞ、項羽聞いて大きに笑ひ、天下の諸侯も漢中に人なしと嘲らん、必ず止り給へと申しければ、蕭何走り出で、樊噲無用の舌を動かすことなけれ、我れ不才なれども、丞相の職にゐて大將軍を薦め、事既に定つたり、樊噲を縛つて獄に下し給はずんば、諸大將皆不禮に倣はんと申しければ、漢王武士に命じて樊噲を縛らせ給ふと、扱昨日の講釋は漢楚軍談五卷目、張良が割符を以て、蕭何曹參兩人が、韓信を大將軍になされと進め申した所でござります。今日は其次、漢王壇を築いて韓信を拜すと云ふ下、扱只今素讀致いた樊噲が人柄は、各々方の思召しは、定て色眞赤いに頬髭荒れ、我儘氣隨の大力、日本で申さば、アノ坂田の公時か、公平杯が様に有らうと思召しましよ、中々強いばかりでござりませぬ、智慧第一と言ふ張良、陳平にも劣らぬ大分別者と聞えました。時に分別と言へば、此本文のごとく、樊噲が韓信を大將軍に拜なさるゝことは無用なりと止めたる答、

それ縛れといふやいなや、がらり後手三寸縄、牢屋へついと引いて参つた、其處で供先がもやつき出した、彼處ではちよびくさ、此處ではぶつくさ、なんぞと聞けば、樊噲殿さへ彼の通り、況んや我等韓信を大將軍になさるゝこと、御無用なりと言うたら最期、がまれゝと幾千萬の大將士卒、皆韓信が手下に付いた、何んと我身一人縛られて、大勢の口をとめ、韓信が下知を聞かせた樊噲は、力ばかりでない、大分別者ではござりませぬか」と聴衆も聞取り餘念なく、心空なる空かきくれ、俄に一群降りくれば、やれ大降りとゆふだちの、足もとまらず聞く人の、皆ちりゝゝに逃歸る。残るは甚内只一人、邪魔な雨やとゆふ立の、跡晴れ渡る講釋小屋、又人寄を待ち居たる。降る雨は、とてもかくても凌ぎなん、涙の雨は晴間なく、凌ぎかねにし衣笠は、父大宮司に誘はれ、親子潛に古郷を出で、心ざす方そんじよそこと、音に聞きつゝ音羽山、清水を尋ね來りしが、側へを見れば、講釋小屋に人待つ風情、幸と立寄つて、「是れ物問はう、五條坂は何處ぞや、阿古耶と云ふ遊君の、所を知らば教へてたべ」「ハア、是はお連も女中方、遊興なさるゝでも有るまい、ハテめんような人をお尋ねなさるゝな」「されば阿古耶と云ふ女に逢はで叶はぬ我々故、尾張から遙々尋ね参つたり」「はてそれは遠方から御大儀千萬、是れ此道を南へ行當り、左へ上る道が有る、それを一丁半程いて、花扇屋の戸平次と尋ね、阿古耶と

問へば隠れがない」「是れはくゝ忝ない、去ながら、名も家名も覺え憎い、筆があらば貸してたべ」「いや筆は有合せず、其お持ちなされた扇子を鼻へ斯うお當てなさるれば、花扇つい思ひ出さるゝ」と、座興も老の律儀に受け、「此扇を鼻へ當てれば花扇、コリヤ出來た、講釋なさる程有つて、頓智發明覺えたゝ、御禮は重ねてゝ」と、娘をいざなひ尋ね行く。かゝる所へ、「捕つたゝ」と聲高く、檢斷所の捕人の役人、ばらゝと駈來り、講釋小屋を追取り巻く。思ひがけねど豫ての覺悟、甚内床几をひらりと飛び、後の高垣小楯に取り、小屋の柱の節間近き、陳竹取つて押撓め、身構へし、「ヤア人違ひか名の誤か、講釋は致せども、召捕らるゝ覺えなし。上を恐れ奉れば、刃物に手は懸ねども、仔細を聞かぬ其内は、繩もかゝらず、サア仔細を言へ聞かん」と、八方睨んで控へたり。「ヤアこざかしき咎め、上意を背くか、仔細は御前で直に聞け。物な言はせそ、打ちすゑて引つ括れ」と一番手、十手振り上げ突つかゝる。さしつたりと飛びちがへ、歪めし竹の片手を放せば、眞額より片鼻かけ、はつしと弾かれ、眼暗んでたぢくゝ、蹠ひ辿り引つかへす。二番手は又鎗を、捕つたと突き出す狙ひを外し、沈んで裾を反ねさすれば、向脛をあいだしこ、眞逆様にでんぐり返り、隙もあらせず三番手、棍棒取りのべ、巻いて捕らんと突き出す。心得たりと身をかはし、つゝと入つてすてつべい、微塵に

なれとしつぺい彈き、棍棒からりと投捨てよ、べつたり土につくばうたり。一人がかりは叶
じと、大勢四方を取廻し、亂れ蒐るを事ともせず、脛骨肩骨、當る所を幸ひに、力有りたけ人
有りたけの、節を碎き手を碎き、心を碎いて凌ぎける。されども防ぐは只一人、終に大勢折り
重なり、押へて繩をぞかけにける。物頭半澤六郎成清駈け著くれば、組の小頭罷出で、雙方の
働き具に相述べ、目通り近く引つすゆる。六郎立ち寄り、面體より形格好、とつくと見届け
びつくりし、「扱こそく、早まつたることしたりな、似は似たれども、御尋ねの者にはあらず
人違ひ、それ繩解け」と有りければ、捕手共ぎよつと互に顔見合せ、解きかねて立ちかねれば、
繩付も共に驚くばかりなり。「ヤア關原甚内とやらん、繩懸けし間もなく解けといふ、嘸不審立
つべし。我主人の相役岩永左衛門殿、夜前對顔の節和殿が噂、下河原にて辻講釋する甚内と云
ふ者こそ、平家の侍惡七兵衛景清に極つたり。月番なれば重忠の手より召捕り給へと有りし故、
某を召され、召捕り來れ、去ながら世には似たる人も有る、粗忽の仕方すべからずと仰を受け、
實否を聞きつくらふ其内に、組の者共手柄を爭ひ此仕合、彼等が粗相は六郎が誤り、手を摺り申
す宥免せられよ。去にても一腰を帶しながら、上を恐れ刃向はざる神妙さ、ホウ働の健氣さ奥床
し。甚内と云ふが實名か、名乗られよ、披露して爲惡しくは計らはじ」と、立寄つて繩解きほど

けば氣もほどけ、扱はと安堵してけるが、飛びしさつて手をつかへ、「是は却て恐れ入つたる御
詫言、日本一の剛の者と聞及ぶ、景清に似たる故、御疑に預りしは、身に取つて恥辱にあらず。
重忠の御内に、誰あらん半澤六郎成清殿、繩解いて下さる上、何を不足に一言のお恨み申すべ
き。殊更身の上御尋ね、申さねば結句憚有るに似たり、關原甚内と申すは今日渡世の假の名にて、
誠は伊庭の十藏一幸と申す浪人者、一人の老母養育みの爲、面をさらす辻講釋、物給べなうと請
はざるばかり、世に住む甲斐もなき身の上、御尋ねによつて物語、御恥し」と俯伏き、涙ぐみて
見えにける。六郎下部に持たせたる烏目、十藏が前に置かせ、「和殿古き文にも見つらん、龍も
池中に在る時は、蚯蚓に類を同じうすれども、上天の氣を得る時は、勢ひ宇宙に溢ると見えたり。
今浪人の世渡りは、何をしても恥ならず、立身出世は頼てのこと、随分老母に仕へられよ。輕少
ながら此烏目、老母の方へ進上申す、必ず人違に、渡世の邪魔せし心付などと思はれそ
と、聞きもあへず、「いや〜、只今一錢でも申受けては、人違の勘忍代となり、詫言の料
などと、雜人の口に懸けられては、貴公も我も一分立たず、無用なり」と、戻さんとせしが待
てしばし、老母に下さるゝ志、突返しては不禮の至、申受けては快からず、ハテ何とせんか
とせんと、あたりを見廻し、「それよく、此奉る觀世音、老母の二世を加護し給へ」と、側に

立てたる清水の、餐錢箱へ投げこんだり。「なう其義心を見るに付け、彌々粗忽面目なや。此旨主人に言上すべし、又對面せんいざ去らば」と、一禮述べて立歸る。權威に募らず誤りを、誤り入つたる六郎が、淳も秩父の家柄を、却て譽めざる人はなし。十藏跡を見送りて、「エ、花も實も有る武士や、萬一外の役人ならば、儂が粗忽を包まんと、何の分も聞き入れず、今時分は後手に、オ好かぬことく、こんな時は早く歸つて、母者人のお顔を見るが身の祈禱」と、一人呟き、「是は扱、小屋を粉灰に打ちめいだ」と、散りちろばひし木や竹を、拾ひ集むる折こそあれ、深編笠に世を忍ぶ、浪人めけども鰭有る男、菊水の邊に立ちやすらひ、「なう講釋殿く」と小手招き、「ヤ誰ならん」と、立寄つて差覗き、「是は御浪人様、此頃は見えもなされず、今日は觀音の御縁日、定めて御参りなされうと、今朝から心待ち致した。今御参詣かお下向か。お聞きなされて下さりませ、私を惡七兵衛景清ぢやと申して、重忠の家來半澤と申す者、只つた今参つて召捕らるゝ所、人違ひに極り歸りしが、御覽なされ、小屋も打ち碎かれ、お腰懸けられと申す所が無い」と、氣の毒がれば、「それ餘所ながら見申した、なう其惡七兵衛景清とは身共が事さ」「エ是は思ひ懸もない、其景清様が何故に、去る秋お目にかよりしより、御不便を加へられ、今頃拂底な金銀を、毎度々々何故下された」と肝潰せば、「いや未だ跡に段

段有る、一時に肝つぶすまい。今日半澤六郎が召捕^{めしこり}に來りしも、御身が形格好、此景清に能く似たる故、其^{その}似たる故、某かねて思ふやう、天下の武將頼朝を狙^{ねら}ふ我なれば、却て我を詮議も厳しく、用心も又さぞあらん。頼朝に心ゆるさせ、油斷^{ゆだん}を窺^{うかが}ひ討たんには、此講釋師をこまづけ、退引^{のつぎ}させず腹切らせ、景清運拙なく、切腹せしむる者なりと、書置を添^そへ置かば、すは景清こそ腹切つたんなれと、京鎌倉心ゆるし、油斷^{ゆだん}は必定^{ひつじやう}、其虚を窺^{うかが}ひ討たん物と分別し、折々與へし金銀は、和殿を殺さん命^{いのち}の價とは知らざるか」と、聞いてぎよつとし、驚き顔の色ちがへば、「いやぎよつとせらるゝな、未だ驚くことが有る、花扇^{けなふや}耶の阿古耶が兄の伊庭^{いへ}の十藏殿」と、いへば大きに仰天し、「してく私の本名、阿古耶と兄弟と云ふこと、何として御存^{ごぞん}じなされた」と、興させば、「面體^{めんたい}格好の似たる貴殿さへ、景清かと詮議^{せんぎ}有る我なれば、厳^{きび}しさを推量せられよ、都に足は留め難し、一先立退^{ひきさうた}かんと思ふに付け、五條坂へ立越え阿古耶に出逢^{であ}ひ、右の段々を語^{かた}れば涙を流し、其講釋師甚内と申すは、伊庭^{いへ}の十藏と云ふ我兄弟なりとの物語、我も聞いて興^かさめしが、假初^{かりそめ}ながら馴染^{なじみ}深く、子まで懷胎^{くわいた}せし其中に、今までそれとは何故知らせざりし、其心では我事も、兄には咄^{はな}すまじと尋ねれば、大望^{たいまう}有る御身の上、兄にも心置かれ、露^{つゆ}ばかりも知らせずと、我をかばふ阿古耶が貞心^{ていしん}を聞くに付け、我が禍を貴殿に塗^ぬらんと、

其時まで思ひ詰めし物語し、我惡念空恥しく、一生赤めぬ此頬を、燃え立つやうに覺えしぞや。知らぬ内はそれも是非なし、知つては片時も捨て置かれず、今宵立退くを明日へ延ばし、我心底を打明け、縁者の因を結ばんと、わざく是まで参りたり、十藏殿」と、思ひ侘びたる面色に、餘りのことに呆れもせず、「扱は阿古耶を不便に思召す方よりと、老母が方へ度々のお心付も貴公よな、ハア」はつとばかりに差俯伏き、暫し詞もなかりしが、「エ、くやしや、此事を昨夕にも今朝にも存じたら、半澤が来りし時、我こそ上總の景清に成り濟まして、仕様模様も有つた物、おそかりし残念や」と、拳を握り身を顫はし、目を摺り擦するばかり。「なう其心底聞いたる故、逢はで行かんも本意なさに、是までは來たつたり。構へてく我事は、心の端にも懸けらるゝな。骨柄と云ひ器量と云ひ、奉公すとも易かるべき身なれども、老母の末期を見届けんと、諸人に面をさらし辻講釋、三錢五錢の志に命を繋ぎ、恥を忍ぶ親孝行、感じても猶餘り有り。阿古耶が縁につらなる我なれば、貴殿の老母は我母なり、七十に餘り給ふと聞く、此世の逗留未近し、起臥心を付けられよ。著古したれども此羽織、是を貴殿へ参らす、今まで贈りし合力は、塵塚に捨つる塵埃泥に投げる石瓦に劣つて、恩にあらず情にあらず、是ばかりこそ景清が、誠の心を染羽織、朝夕肩に打ちかけ、一所に孝行頼み入る。心せかすば立寄つて、

老母のお目にもかゝるべきが、世をも人をも忍ぶ身の、無體御免と傳へてたべ。随分健固に又對面、お暇申す」と立出づる、袖にすがつて「なう暫く、心は千萬留めたけれども、忍ぶも且は智略の一つ。してゝ落行く先は何處、言ひ残されよ」「さればく、今宵は上の醍醐に一宿し、其行先は又其處にての思案次第と思はれよ」「オ、尤々、何をいふも、此處は途中恐れ有り。詳しきことは跡より追付き物語、我行くまでは必々逗留あれ。是れ斯うく」に耳に口、外には誰もきく水の、井戸を隔てゝ囁き合ひ、「先それまではさらばさらば」「オ、さらば」と、互の目禮思はずも、映る姿の水鏡、「それ十藏殿、其の顔が此顔と」「なう景清殿、其面體が我頼と、似たではないか」「似た段か、思へば半澤六郎が、見違へたるはハ、ハ、」笑うて互に別れける、勇者は離別に歎かずとは、かゝる事をや三重ゆふ間ぐれ、物の黒白も見ぬあたり、小家がちにとすさみぬる、筆の跡には引きかへて、町の模様も風俗も、得ならず見えし五條坂、黄昏時を戀ひわびる、懸行灯の灯影さへ、白く咲きたる軒のつま、花扇屋と隠れなし。家名ばかりは人めきて、主人を問へば戸平次とて、こゝら名うての横著者、色と慾とを二道に、稼ぎ歩いて歸り足、表の口より喚き聲、「こりや何奴も店にけつからぬ、只た今日が暮れたに、何處へすつ込み臥つてをるぞ、竹め、林め」と呼立つる。下女も小女郎も所ずれ、「オウオ結構な旦那様、内はお客で

てんく舞ひ、お料理よ吸物よと、上を下へとかへして居るに、今頃戻つて、内外の者は何んに成れ、アレお手が鳴る、ア、イ。お林、ちやと往てたも」と忙がしがれば、「何んぢや、客がとれた、町人が二本か、喰ひ度い物喰うてすいぢやないかよ」「いえく歴とした旅のお方、お供の衆に問うたれば、尾張の國に去るお方、今度京へ忍びの御行き、内方の阿古耶様を、聞き及んでのお望み、随分御馳走申せと現銀の仕拂ひ、昨日の晩の丁字頭が、こんな小判に成りやした」と、一包差出せば、「こりや出来しをつた、天晴忠義」と、金に逢うてはほやく顔、障子の隙より奥差覗き、「さうして阿古耶は座敷に見えぬが、こりや何處に何して居る」「いえいえ、阿古耶様は晝過から、祇園の佐野屋へ送つて、それから直にいつもの清水参り、ほんに奇特なおさんで」と、云ふを打消し、「何が奇特、嬉しがりもしられぬ觀音様へ参らうより、此おれに靡きをつたら、なんほ利生が有らうぞ。イヤ好い事を思ひ出した、清水へ逆寄せして、戻る所引捕へ、日頃の思ひ晴してくりよ」と、言捨て出づる門口へ、町の歩使が「申し、何事が起つたやら、お代官のお使が、名主様を會所へ呼付け、目の抜ける程叱つた上、花扇屋の戸平治を連れて來いと、焦立ての口上、サアちやつとござりませ」「ハテきよとくしい彼の頬はいの。高が何ぞの言渡し、ちよほいち張るな。畏つた、第一の宿成らぬ、心得たと、判さ

へ捺せば濟むこと、留守ぢやとは吐かさいで、胴因果な猿松め、サア失せをろ」と先に立ち、膨れ頬して出でて行く。白波の、寄する渚にあらねども、こよも流の假枕、跡なき夢はつい覺めて、送り迎ひの袖の露、伊達にふつくあこやとは、浮世に振ねし戀の闇、照す廻しが挑灯に、それとしるしの花扇、主が許に立歸る。奥の座敷に只一人、待つも久しき宵の月、あやしの簾かけ造り、障子半部押明けて、隔てぬ中の親子づれ、前の大宮司通夏は、娘相手の氣晴し酒、人の氣を汲む小女郎が酌、「お待ちなされた阿古耶様、今お歸り」と知らせるにぞ、國元までも隠れなき、花の都のお女郎、さあく是へ」と老人の、不束ならぬ挨拶に、様子有り氣の一座とは、見て取る阿古耶が胸の中、上への伊達の勤振、「ほんに浮世は味な物、こんな侘びた所さへ、色里の数に入り、遠い國まで隠れなく、阿古耶を見ようの呼ばうのと、心づくしに預るは、苦界するの身に取つては、忝いとも本望とも、萬の事はさし置き、飛んでも戻る筈なれど、心に任せぬ憂き節とて、立ち破られぬ先の座敷、斷りたらぐ漸々今、遅いは赦しなさんせ」と、烟草吸付け差出せば、女中は烟管いたどきて、「花も實も有る仰、先づ盃とも申さうが、父様とても自も、尋ね聞きたい分有つて、心がせけば」と差寄りて、「平家の侍七兵衛景清殿、過ぎつる壽永の秋の頃、御一門の御供し、西國に下り給ひしが、御身の上に恙もなく、

都に歸りましたすと、慥な便り聞きながら、終に一度の便宜もなし。そもじのことは豫てより、聞いて知つたる深い中、七兵衛殿のお身の上、御座り所も御存じならめ。姫御前は相互、語つて聞かせて給はれ」と、打付けに問ひ懸けられ、扱はと彌々心にをさめ、「其お尋は何のこと、七兵衛さんやら八兵衛さんやら、一座流れのお客の名、當座は覺えて居もせうが、跡が跡まで、それがまア、寺方か何んぞの様に、過去帳に付けては置くまいし、わしや知らぬはいな。殊に深いの浅いのと、微塵此方に覺えの無いに、そんな事聞きや遣る瀬がない」と、流行詞で紛らかす。父の老人側より引取り、「いや是は御尤、世間存ぜぬ田舎女、我胸ばかり合點して、藪から棒の尋ねやう、なんの有りやうを答へ召されう。斯く申す拙者は、尾張の國熱田明神に仕へ申す、前の大宮司道夏、これなる娘は衣笠とて、彼の七兵衛が連添ふ女、露程も隔て心ない中、前大宮司通夏とは、豫て沙汰にも御聞き有るべし」「ナアニそんなむづかしい、歌骨牌に有るやうな、永い名は今が聞初め、衣笠様でも塗笠様でも、知らぬことは仕様ことがない」と、けんもほろよに言ひ放せば、「そんなら如何でも我夫の、景清様は知らぬぢやまで。エ、さもしいぞや穢いぞや、流石は浮かれ女一夜妻、我心に引きくらべて、本妻の衣笠が、怪氣嫉妬の氣もあろかと、疑うての事ぢやの、慮外ながら熱田の大宮司、長袖とばかり思うてか、二腰差いて

武士の行儀、其娘の衣笠が、何の卑怯な妬みが有らう。夫の噂の様にもない、見ると聞くとの
お女郎」と、心の蔑しき穂に出づれば、猶も勤の氣質を見せ、「妬が有らうが鼠が有らうが、知
らぬから構ひはせねど、素人女子の癖として、流を立つる身とさへ言へば、さもしいとのみ心
の嘲り、口へは出ねど顔へ出て、はしたない本妻呼ばはり、本妻ぢや妾ぢやとて、夫を思ふに
二つはない」「オ、其思やる夫の行方、否やでも應でも知らさにや置かぬ」「こりや新しい、を
かしいはいの、面々の夫の行方を、此阿古郎に無理に知れか」「まだしらぐしい彼の顔はい」
「エ、つべこべと彼の口はい」と、互に募る女の意地、煙草の愛想も引換へて、二人が燃すし
ゆらをの煙管、かつちかちく灰吹の、口もさよけるばかりなり。折しも伊庭の十藏は、
講釋の場の人達へ、不慮の難儀を遁れし上、景清が情の程、妹阿古郎に語らんと、心ざした
る宵の間の、人目にかざす扇屋の、内に通れば下女小女郎、「是はマア久し振、珍らしい
御出」と、言ふに阿古郎が氣の配り、尻目遣ひ簾越し、見馴れし羽織の紋所、兄十藏とは露知
らず、顔は反向けし灯火の、景清と見るよりも、悪い所へうとましと、思ふ心に思はず知らず、
「まあく今宵は往んでく」と頭振る、「いや此兩人罷り歸らぬ、夜が明けうが日が出ようが、
尋ぬることを聞かぬ間は、いつかなことにじらぬ、ヤアえいとこな」と床の間の木枕取つて

寢轉ぶにぞ、「オ、何時までなりと氣根次第、勝手次第、勝手にく、座敷へは差合ぢや」と、心を碎く言廻し、十藏何んの氣も付かねば、次の座敷に人待顔、「アレ未だ往なすぢやエ、辛氣、氣に喰はぬ座敷、べらくとは勤めぬ」と、すつと立つて間の障子、ばつたりさすがに衣笠は、おほこ育ちの氣も弱く、何と詞をかけ造り、下の座敷と隔して、心を明かさぬうたてさよ。阿古耶は次へ立つや否、「時も時折も折、ひよんな所へ景清殿」と、縋り寄つて「ヤア兄様、十藏様、さつても似たり、横顔なら形振なら、瓜を二つ。其上に此羽織、如何して召して」と不審顔、胸なで擦るばかりなり。「さればく、似たに就て今日は既に危い事」と、耳に口よせこまぐと、暫く語る其内に、垣間見したる前大宮司、娘引き連れ、「やあく聲殿、見付け申した、お隠れ有るな」と聲かくれば、衣笠も後に寄り、「是なう聞えぬ景清様、如何程忍び給ふとも、手づから仕立てし此羽織、見違へて好い物か」と、身を引廻し顔を見て、「ヤア此方は今日の講釋殿か、ハツ恥し」と差俯伏き、しばし詞もなかりしが、「此羽織召すならば、景清殿のお行方、此方が知つてに極りし、わしに聞かせて給はれ」と、頼むにも又涙なり。十藏も重ねく、取違へられ氣もとまぐれ、挨拶しどろに呆るれば、「いやく兄様合點が往くまい、彼方はな、尾張の熱田の大宮司様、お娘御の衣笠様、誠有るお方とは、常々噂に知つ

たれども、今の身柄の景清様、お爲如何と心を隔て、時の拍子の言懸り、深うお隠し申せしが、衣笠様聞いてたべ、景清様の御事は、今兄様の御咄、鎌倉よりの詮議強く、都の住居も折悪しければ、暫し他國に身を隠すと、暇乞さへ言傳わさ、日蔭のお身のおいとしさ」と、語るも聞くも涙なり。父の老人十藏に打向ひ、「景清ははや京地を立退き、行方もさだかに知れぬとな。べん／＼と尋ね歩くも、正眞の闇に礫、幸ひかな、其元の形格好、景清に似たる上、定紋の居わりたる其羽織を著されしは、我神道の一體分身、取りも直さぬ七兵衛景清、此前大宮司が逢ひたい用事外ならず、娘衣笠に暇をくれ、夫婦の縁を切つてたべ、頼み申す」と差付けに、思ひこんだる一通り、聞いて驚く衣笠姫、「父様それは何仰しやる、お心の亂るゝ程御酒は上らず、そもやそも俄に狂氣もなされまいが、夫婦の縁を切らさうとは、國元で仰しやつたお詞とは天地の違ひ、わしやつんと合點がいかにぬ」オ、合點はいかにぬ筈、都に上り夫を尋ね、連歸らんとしたはな、此父が虚ぢやはい。世になき平家の討漏されに、縁に繋ぐは身の滅亡、切腹か遠島は鏡にかけて、いやゝの／＼、義理も情も背中へ腹」と、云ふに悲しさ遣る方なく、「日頃は義理も恵も有る、父上と思ひ暮せしに、何時の間に其様な、卑怯なお氣に成り給ふ、淺ましきよ」とかきくどく。「ヤア／＼くどく」と叶はぬこと、是でも非でも景清に、縁切らさうと極

めた胸、變ぜぬが神道の第一、サア景清の一體分身、娘衣笠に暇をくれめさ、一家の因がきり
 たい」と、詞するどにこねかくる。十藏も恠とせしが、憎い心底、恥かよせて腹癒くと、「オ、
 神道の一體分身面白し、我世渡りは軍書の講釋、樊噲を語れば樊噲が魂、張良を説けば張良が
 意氣、其理を以て七兵衛景清が性根に成つて返答する」と、老人が願先、顔突き付けてはつ
 たと睨み、「神は非禮を受けずと云ふに、穢れ不淨の魂にて、頬の皮の熱田の糟褻宜、そつちか
 ら望まいでも、此方に添はぬ女房、去つた」と、詞も引かぬに衣笠姫、「イヤ推參な十藏、
 澤山さうに人の女房、去つた」としこなし顔、しや本にをかしい。寄るもく氣違の有る條、
 此衣笠は相手にならぬぞ」「相手にならうが成るまいが、舅が心見下けし上は、男のかうけ離
 別離別」「オ、此父が吞込むからは、如何にもさつぱり縁は切つた」「いゝえ、なんほ仰しやつ
 ても、景清殿は金輪際我夫、斯う言うたらてつきりと勘當、親子の縁を切らうで有らうが、親
 子の縁を切らうより、此首切つて下さんせ。夫故に死ぬる命、塵とも思はぬ、是程に思ふのに、
 景清様の返答は、どうで有らう講釋殿」と、理に責められて十藏も、感ずる心に面を和らめ、「オ
 オ出来したり女房共、其心底を聞いては、如何にも去れぬ、やつぱり元の女夫々々」「いや此
 な男は、ぐれり」と心のそろはぬ景清、一旦舅がもらうた暇」「いや左様言つても約束變改」

衣「オ、左様でござんす、いつまでも縁は切らぬ」「いや此親が是非去らす」「土いや去らぬ」と三方論議、更に果しもなき所へ、會所を戻る主の戸平次、何時にかはりてぐんにやり首、途方に暮れし其風情、思案中戸にさしかよれば、奥には三人せり合ふ聲、大宮司の景清のと、噂ちらりと聞耳立て、鼻息もせず伺ひ居る。内には斯くとも白髪しらがの父、「何時までかくと争うても詮なき事」と、詞を和け、「十藏殿、阿古耶殿、我一通りを聞いてたべ、衣笠もよつく聞け。惣じて世界の女の子は、生れし親の家を離れ、夫に任す身の上なれば、子とても親の儘ならず、去によつて、親の科を娘にかくる法もなく、娘の科は勿論親の身にかよらぬこと、天下一統の式目、景清を聲に持つたるとて、鎌倉殿の御咎有るべき筈はなけれども、此處に一つの誤りは、景清西國に赴く時節、戰場まで女を具せんも如何なり、預け置かんと頼みし故、今の難儀は氣も付かず、うかくと預り置き、疑ひかゝる聲の縁、エ、一生の不調法、悔しい事をしたなあ」と、破つたる茶碗をついで見るにひとしき愚痴に立歸り、そごろに子供の可愛さ不便さ。鎌倉殿の祟にあはど、如何なる憂き目に遭はんも知れず、ア、恐ろしやと思ふより、所詮我身の義心を捨て、衣笠に縁を切らさば、三方四方の爲よしと、思ひ詰めたる老の思案、臆病者の義理知らずと、笑はば笑へ共の爲、弓矢取る身にもあらず、長袖の身ぢやものと、得手勝手に分別

極め、生れ付きの頑意地ごかしに、是程までは遣り付けしに、娘が誠の心底に、感じ入つたる今日の景清殿、尤とは思ひながら、父が心も思ひ分けて、衣笠を去つてくだされい、恥を捨ててお頼み申す」と、神に仕ゆる身ながらも、子故の道に踏迷ひ、胸の岩戸を引立てて、常闇の夜と知られける。衣笠は猶悲しく、「お年は扱も寄せまいもの、それ程までにお心の、愚にも成るものか、親を人に笑はせて、子の身として嬉しからうか、思ひやつても下さんせ」「オ、それ程のこと辨へぬ某ではなけれどな、儕等が爲め世話煎るに、親にも違ふ胴張者」と、氣を揉み焦つ老泣に、たぐり上げたる持病の痰火、せき上げくせき入れば、「それくそれがお世話かうと、倍しの頑意地や」と、背撫でおろし、「まアあれへ」と、元の一問へ勞はれば、十蔵兄弟明いた口、塞ぎかねてぞ呆れ居る。今まで萎れし戸平次が、様子を聞いて氣はいそく、「是は阿古耶の兄公、好い所へ好うわせた、二人ながら近う寄りや、一大事の談合が有る。先高が斯うぢやは、代官所の侍が會所へおれを呼付け、抱への阿古耶を此方へ渡せ、景清が所在を責めさいなんで言はすと云うた、談合とは此所の事、阿古耶能う聞いてたも、兄公の前で言憎けれど、疾うから和女に惚れて居るは、其人をいとしなけに責めうと云ふ、所へおつと云うて如何遣られう。其上にたつた一人の奉公人、花代なしに屋敷へやつては、口を天井へ釣つて置

屋の商賣がならねば、呼屋の衆も迷惑、そこで味をやつたの、いえ、此方の阿古耶にそんな客はござりませぬ、其上疾うから私が女房に引上げ、今で勤はさせませぬと、ぬつぺりとやつたが代官も賢い、兎角阿古耶を連れ参れ、直に尋ねると手詰の詮議、此所が談合の要所、能う聞きや、是を幸におつと云うて、女房に成つてたもれば、景清が詮議、マアそもじにはかゝらぬの、兄公左様ぢやないか。それでも代官が呑込まぬか、其所に一つの上分別、此處が又談合の要所、あれ今奥へ往た大宮司が娘、阿古耶が代りに此奴を捕へて御穿鑿なされませと訴人したら、褒美は少なぐ錢十貫、それを資本に女夫づれで、きんごして遊んだら、面白かるでは有るまいか。十藏殿は小姑、妹輦の戸平次が、講釋さして置くまいぞや。サア此談合否か應か、應なら極樂否なら地獄、如何ぢや」と氣を焦つ。二人は目ませに首肯き合ひ、「是は段々尤の御分別、何の是が談合どころ、あつと申せ妹、花扇屋のお内儀様とは、氏なうて玉の輿」と、きはうて見すれば、「ム、ウ兄公好い合點、いや見かけに似合はぬ埒明ぢやはいの。サヤ阿古耶如何しやる」「さればいな、私ぢやとて、木でも石でも作らぬ身、まんざら憎うは思はねど、兄様や母様の、心を今まで氣兼ねの遠慮」「おつと讃めた、皆まで云ふまい、そんなら女夫に成る氣ぢやの」「はて扱、兄の十藏が水入らずの媒介」「ほんに左様ぢや、祝うて三人打つて

置け、しやんく。シイ、奥のお客を迹がさぬやうに、御馳走申しや女房共、たつた今會所へ往て、褒美の十貫擔けて戻ろ」と、儕獨が胸算用、はき違ひたる足もととは、草履下駄やら雪駄やら、心も付かず走り行く。十藏跡を見送つて、「是々妹一寸延びれば尋延びると、偽りは偽つたが、宿の仕廻は思案が有るか」「ア、兄様には似合はぬ案じ、此間に衣笠様、何處へなりとも落しまし、代官所へは潔よう、此阿古耶が捕らはれて、責殺されるがせてもの、景清様へ心ざし、わしもお前の妹ぢやもの」「オ、でかしたり神妙なり、其心底を聞けば安堵、某は今宵の内、景清に追著き件を語り、一時も早く都を遁さん。落著く所は知邊有つて」と、語ればちやくと兩の耳に、手をおしあてて、「ア、是々、景清様の落著く所、わしに聞かせて下さんすな。聞くまいと云ふ其心は、如何なる火水の責に遭ふとも、性根亂れぬ其内は、隠し抜かうと思へども、心の底に覺えあらば、身のくるしさに氣も弱り、口走るまいものでもなし、わしやそれが悲しさに、乞求めても聞きたい知りたり夫の行衛うはの空、世界の女房の風上にも、置かれぬ私は因果人、お腹に宿した此嬰兒も、能々の業人、哀れと思うて下さんせ」と、忍び涙ぞはてしなき。十藏も心根を、不便としをるゝ氣を取直し、「ヤア最前の詞に似ぬ、未練の歎に際どりて、衣笠様にあやまちあらば、心の操皆むだごと。ぬかるな妹、十藏はや往くぞ」と、跡に

も心残れども、先も恩有る義理の道、立別れてぞ出でて行く。阿古耶は思ひの胸押下け、「ア我ながら愚痴涙、なんとして泣いたぞ」と、心に心恥ぢしめて、奥の一間を窺へば、はや表には挑灯の、光も權威のはいはい、戸平次は先に立ち、鬼の首を取つたる心地、「女房共く、阿古耶は何處にぞ、代官様がお出ちや、奥のお客はなんとした」と、問へど返事もうろつく内、庭に入込み代官が、さも横柄にいかつ聲、「熱田の神職前大宮司通夏は何處に在る、かく云ふは岩永左衛門が家隸荒木源五と云ふ者、御邊の娘衣笠、悪七兵衛景清に縁を組めば、お尋ね者の一類、尋ね問ふ仔細有り、急ぎ此方へ渡さるべし。違背あらば理不盡に踏込み、縄打つて連れ歸る、返答如何に」と呼はつたり。前大宮司通夏少しも驚く氣色なく、刀提げ娘を圍ひ、しづしづと立出で、「岩永左衛門殿の下知として、わが娘衣笠を召しつれて歸らんとは、景清が所在尋ねん爲な、それならば無用になされ。西國落に別れてより、景清が行衛ずんど存ぜぬ、隙費えを言はんより、立歸つて此通り、岩永殿に聞かされい。はれ御大儀で有つたな」と、嘲詞に荒木もむつとし、「イヤ知らぬとて知らせずに置かうか、それ戸平次引立てい」と、云ふに阿古耶が、「いやくく、彼方が御存じないと云ふ證據には妾が立つ、かんまへて聊爾せまいぞ。親方の戸平次殿」と、云ふに恟り氣疎貌、「こりや如何ぢや女房ども、親方とは何の事、

狼狽へたか女房共く「エイ嫌らしい、女房とは誰が事、五條坂の阿古耶は景清が妾と、世
 間に隠れない中を、人聞きの悪い、女房呼はり置いてもらは」「イヤ其筈ぢやあるまいがな、
 花扇屋のお内儀様、打つて置くしやんくを忘れたか。媒人の兄は何所へ往た、兄公々々」と
 うろたへ眼、源五にばつたり行當るを、はつたと睨め付け、「阿古耶を女房とは大きな偽、儕
 とても遁さぬ奴、此上は二人の女、連れ歸つて拷問する。サアく大宮司娘を渡され、忝くも
 鎌倉殿の御代官、岩永左衛門が下知を受け向うたる某、身不肖の侍と侮つて、願くひ違へ、
 後悔ばしせらるゝな」と、權威に任す理屈詰、返答もせず默然と、しばし思案にくれ居たる。
 「ヤア人にばかり物いはせ、うんともすんとも答へぬは、説意を嘲る科人、其方とても遁しは
 せじ」と、詞あらゝに責めかゝる。老人ほつと息を吐き、膝を打つて、「ホ、ウ左様ぢや、愚痴
 に歸つた老耄、今眼が覺めた」と持つたる刀、娘の前に投出し、「儕も前大宮司通夏が娘ぞよ、父
 が今まで立てぬいた固意地、むだごとにせぬ様に、合點したか狼狽へな」と、以前の未練に引
 きかへて、詞も涼しき目の色に、衣笠刀押戴き、「親の譲りの固意地、受繼ぐは娘の役、其固
 意地を見て置け」と、すらりと抜いて戸平次が、肩先すつぱと切下ぐれば、うんと反氣に伏し
 ながら、擦まぬ剛氣に武者振り付く。源五もさすが武士の役、刀に手をかけ支へん風情、父は

隙かさず押隔たり、「ヤア騷がれなお侍、其元の相手には此皺腕」と鰐元寛け、抜かば切ら
ず勢に、氣を吞まれてぞ控へ居る。戸平次は深手ながら、しがみ付かんと身を悶く。起しも
立てず乗つかより、ぐつと刺いたる留めの刀、女所爲には甲斐々々し。大宮司聲を掛け、「父
が譲りの固意地、是までは見届けたり、して其跡はなんとく」「アイ此跡は斯様に」と、持
たる刀の鈍を、咽にがばと突立つる。「オ、左なくては叶はぬ筈、死損ふな立派にせよ」と、
瞬もせず目もり居る。衣笠顔を振上げて、「ア、有りがたや父上の、未練のお心翻り、健氣の
お顔見て死ぬれば、親子の縁も切らぬと云ふ、大宮司が娘こそ、景清が妻なりと、末世末代いはる
るは、我身の上の諸願成就、神の教の高天が原、佛の道の極樂淨土に、今ぞ赴く嬉しさ」と、苦し
み包む笑ひ顔。阿古耶は詮方うろく涙、手負は次第に息弱り、今こそ娑婆の黄昏時、終には萎
む夕顔や、五條あたりの白露と、消え行く身こそはかなけれ。父は歎きの色目もなく、「口論によ
つて戸平次を討つて捨てたる娘の衣笠、自害したれば算用済んだり。此上にも言分あらば」と、苦
り切つたる面色に、「ハテ相手同士死ぬる上は、此方に構はぬこと」と歎に沈む阿古耶を捕へ、物
をも言はせず引立て行く。大宮司は本意なけに見送つて、死骸に寄り、「ヤハ娘出かしてくれた、
去りとしては能う死んだ。エ、うぬく、戸平次め、能う訴人しをつたな、好い氣味な目に逢ひをつ

た、去^{きり}ては能^{なり}うは切^きつたぞ殺^{ころ}したぞ。此^{この}親^{おや}が老^{おい}に耄^ぼれ子^こに迷^{まよ}ひ、埒^{らち}もない分^{ぶん}別^{べつ}違^{ちが}ひ、恥^{はぢ}の有^ありたけ吐^{はき}出したに、おこ^{こと}が死^しんでくれたので、魂^{たましひ}がさつぱり、景^{かげ}清^{きよ}殿^{どの}のお聞^ききやつたら、嘸^{さへ}嬉^{うれ}しかる褒^ほ美^びである。今^{いま}の立^た派^はな最^{さい}彼^この體^{てい}を、見^みせぬが殘^{のこ}り多^{おほ}いはい。健^{けん}氣^きな娘^{むすめ}を持^もつたと思^{おも}へば、心^{こころ}がいそ^{いそ}くするはやい」と、死^し骸^{がい}をしばし押^{おし}動^{うご}かし、「ほんに和^そ女^なは死^しんだもの、生^いきて居^ゐる者のやうに、くよ^{くよ}くと噤^{よみひそ}語^ご、また愚^ぐ痴^ち未^み練^{れん}が直^ちらぬと、吐^{しか}つてくれな笑^{わら}つてくれな。最^もう如何^{どう}もこたへられぬ、一^{いっ}生^{せい}の未^み練^{れん}納^なを、心^{こころ}のたけを泣^なかせてくれ」と、湛^{たみ}へくし涙^{なみだ}の溜^{たま}り、わつと叫^{さけ}びて撞^{たた}と坐^ざし、前^{ぜん}後^ご不^ふ覺^{かく}に見^みえけるが、「ハッア左^さ様^{やう}ぢや、誠^{まこと}に左^さ様^{やう}ぢや、娘^{むすめ}が最後^{さいご}の一^{いち}言^{ごん}に、我^{わが}身^みの納^なを知らせしを、浮^{うき}世^よの塵^{ちり}に交^かはりて、神^{かみ}に仕^{つか}ゆる齡^{よはひ}もなし。神^{しん}道^{だう}より佛^{ぶつ}道^{だう}に、赴^{おもむ}く手^て本^{ほん}は聖^{しょう}德^{とく}太^{たい}子^し、今^{いま}より法^{はふ}の修^{しゆ}行^{ぎやう}に出^いで、四^{して}天^{てん}王^{わう}寺^じに參^{さん}詣^{けい}し。諸^{しよ}人^{にん}に勸^{くわん}化^ひをすすむるこそ、娘^{むすめ}が菩^ぼ提^{だい}我^{わが}身^みの爲^{ため}、有^あり難^{がた}しく」と、差^さ添^{そへ}抜^ぬいて髻^{もこざり}打^{うち}切^{きり}り、末^{すふ}打^{うち}立^{たち}てて立^{たち}出^いづる。簡^{かん}程^{てい}涼^{すず}しき佛^{ぶつ}の道^{だう}、何^{なん}とて熱^{あつ}田^たの神^{かみ}垣^{がき}と、隔^へてはあらじ此^{この}世^よの迷^{まよ}ひ、祓^{はら}ひ給^{たま}へ淨^{きよ}め給^{たま}ふも、利^り益^{やく}は同^{どう}じ南^{なん}無^む阿^あ彌^み陀^だぶの、六^{ろく}字^じは六^{ろく}根^{こん}清^{しやう}淨^{じやう}と、悟^{さとし}り行^いく身^みぞ三^{さん}重^{じゆう}頼^{たの}もしき。

梟の脛短しといへども、是を續がば憂ひなん、鶴の脛長しといへども、是を斷たば悲みなん、民を制すること此理にひとし。されば治る九重に、猶も非常をいましめの、水上清き堀河御所、當時鎌倉の嚴命にしたがひ、秩父庄司次郎重忠、禁裏守護の代官として、兼ねては民の公事裁判、私のはからひなく、道に曇らぬ十寸鏡、智仁の勇士とかどやけり。同席に相並ぶ岩永左衛門致連、南都東大寺の建立より、直様都に押留り、重忠の助役と號し、惡七兵衛景清が、所在をさがす邪智倭奸、表は忠義に見せかけて、己が遺恨をさしはさむ、心の底の二股竹、虎の威を藉る狐とは、きよろつく面にあらはれたり。當日の取次役、兩人の御前に出で、「清水の轟御坊、御出なり」と披露につれ、大廣間より入り給へば、「はやく是へ」と請ぜらる。法印重忠に向ひ給ひ、「平家の侍惡七兵衛景清、轟坊に入り來らば、搦捕つて出せよと、先達ての御使者、尤平家盛の時節は、彼の景清觀音を信じ、七十五里の境を隔てし、尾張の國より日參せしは、世の人の知る所、然るに壽永の戰に西國へ赴き、それよりは音信不通、よしんば忍びて觀音へ、參詣を致すにもせよ、出家法師の手に及ぶ彼にもあらず。搦め捕らるゝ仔細あらば、それこそは武家の役、出家には不相應、此儀を辭退申さん爲の參上」と、憚る色なく宣ふにぞ、重忠不審の氣色ばみ、岩永左衛門詞をすゝめ、「いや是は秩父殿の御存じなきこと、某が存じ

付き、もとより御坊は景清が檀那寺、心を許し參詣せまい物でなし、所を瞞すに手なしとやら。搦め捕つて出されなば、褒美は一廉、お寺の爲と存するから」と、言はせも果てず、「こは怪しからぬ致連の御仰、我真言の密法は、五輪種子、周遍法界、鬼畜人天、皆是大日と説かれて、廣大無邊の大慈大悲、景清來つて我を頼まば、一命にかけて圍ひは申すとも、搦め取つて出すなどとは、耳にふるゝも穢らはし。假しそれが曲事とて、没收せられば傘一本、沙門の身に厭はぬこと」と、詞を放つて申さるれば、岩永も云ひがかり、「ヤアねちくさい老僧、大日やら大熱やら、それは存ぜず、景清が肩持達、後日に屹度沙汰に及ばん。既に以て近い手本は五條坂の遊君阿古耶と云ふ女を、六波羅の松蔭に引出し、景清が所在を訊ぬる毎日の拷問、昨日は拙者が承はり、今日は是なる重忠の常番、家來共に吩咐けて、憂き目を見すると云ふこと京中に隠れなく、則ち其松を阿古耶の松と、異名まで付くる程の大詮議、知られぬと云ふこと有るまい。事によらば法師の身とて、拷問せまいものでなし、轟坊を引きかへ驚坊にしてくれん。ヤアよしないお坊にかよつて、御用どもを怠る」と、指したる事もなければ、仕廻付かねば座を立つて、次の一間に入りける。重忠法印を近く招き、景清が詮議の事、重忠が胸中口外に出さぬ事ながら、貴僧は格別、明かし申さん。平家の方にも誰彼と名有る弓取は多き中

に、彼景清は一人當千、可惜しき武士、假へ搦め捕ればとて、無下に一命を斷つべきや。何とぞ彼が心を和らめ、源氏の幕下に付け置かば、勇者の胤を日本に、永く残さん國の寶、臥龍先生が孟獲を七度まで助けかへし、終には蜀の味方となしつる、例をまねぶ寸志の忠義、景清稀に入り來らば、此道理を演説有つて、源氏に仕へ存命せよと、諫めの教はお僧の役、必ず頼み存する」と、敬ひ深く宣ふにぞ、轟御坊はつと感じ、「今に初めぬ秩父殿の仁愛、一見阿字の佛教も外ならず覺えさふらふ」と、歡喜の領掌なし給ひ、「はや御暇」ともぎどうに、出家氣質の濁なき、清水さして歸らるよ。秩父の郎等榛澤六郎成清、遊君阿古耶を拷問の、時刻もかぎる未の刻、六波羅より立歸り、御門におろす囚人駕籠、簾を上げて引出す。姿は伊達の檔や、縛の縄引きかへて、縫の模様の糸結、小褻取る手も儘なれど、胸はほどけぬ思ひの色、形は派手に氣は萎れ、筒に活けたる牡丹花の、水上けかぬる風情なり。榛澤六郎御前に出で、「仰せに任せ繩をゆるし、様々宥め不便を加へ、尋ね問ひ候へども、何分景清が行衛存ぜぬとばかり、外に出す口も是なき故、召しつれて候」と、披露半ばに岩永左衛門、つかくと立出で、「ヤア不念なり榛澤、科人に縄も懸けず、其上見れば拷問に勞れたる氣色も見えぬが、エ、聞えた、扱は御邊が今日の拷問、生緩くやられしな。よい、明日は拙者が受取、さうく家來任せにも成るまじ、自身

の手並見せつけ、景清が所在ほざかして見せう。侍共やい、彼の女め、岩永が屋敷へ引け」と、例の粗忽を重忠押しとめ、「いや先待たれよ岩永、繩をゆるし拷問をゆるめしも、榛澤が私ならず、某が了簡、其上に今日の暮までは此方の計ひ、其元のお構ひない筈、入らぬ世話御無用御無用。こりややい阿古耶、今日もまだ白狀せぬ由、はて扱しづとい、なぜ言はぬ。去ながら、それもなア無理とは思はぬ、義理と情を表に立つるが遊君の慣ひ、いかに責めらるゝが辛いとて、馴染を重ねた夫の行衛、つい應とも明されまいサ。さなきだに流を立つる女は、誠なき者と一むきに心得し輩もあれば、それらが譏もうたてく思ひ、又は同じ憂き節を勤める友朋輩の顔汚し、などと思つての事ならんが、此處をとくと合點せよ。景清が行衛存すべき者なればこそ、搦め取つて詮議もする。有りやうに白狀すれば、忝くも鎌倉殿の御意を安んじ奉り、天晴の御奉公、萬人の譏を受けても、君一人の心に叶はど、其身の冥加悪しかるまじ。こよを能く辨へて、サアさつぱりと景清が所在、此重忠に聞かせい」と、物和かに理をせめて、然もこたゆる詮議の詞、阿古耶は聞いて、「さつてもきびしい殿様、四相を悟る御方とは、常々噂に聞いたれど、何の仔細らしい、四相の五相の、小袖に留める伽羅ぢやまでと、仇口に云ひながせしが、今日の仰に我が折れた、勤の身の心を酌んで、忝いおつしやりやう、何んくの誓文で、

景清殿の行衛知つてさへ居るなら、お心にほだされ、ついほんと云うてのけうが、何を云うても知らぬが眞實、それとても疑ひはれずば、ハテ何時までも責められうはいな。責めらるゝが勤のかはり、お前方も精出して、お責めなさるが身のお勤、勤と云ふ字に二つはない、ア、浮世では有るぞいな」と、云ふに側から怵へぬ岩永、「ヤアべりくとはつしやいだ願骨、是非白狀をせぬに於ては、此間の拷問に品をかへて憂き目を見する。聞けばうぬは懷胎とな、よいよい、急度思ひ付いた、腹に子の有るかざみの格、鹽煎責にしてくれう」と、威しかくれば、「ハ、、、、そんな事怖がつて、苦界が片時ならうかいな。同じ様に座に並んで、殿様顔してござれとも、行きかたは雪と墨、重忠様の計ひとて、榛澤様の今日の詮議、細も懸けず責もななく、六波羅の松蔭にて、物ひそやかに義理すくめ、さまぐと勞はりて、サア景清が行衛はと、問はれし時の其苦しさ、水責火責は堪へうが、情と義理とに拉かれては、此骨々も碎くる思ひ、それ程せつないことながら、知らぬ事は是非もなし。此上のお情には、いつそ殺して下さんせ」と、とんと投出す身の覺悟、持て餘してぞ見えにける。重忠榛澤を近く召され、「箇程心を盡せども、誠を明さぬ上からは、目通りで拷問せん、それく」と仰せ有る。詞の尾に付く岩永左衛門、「やあくゝ者共、阿古耶めに水くらはす、用意々々」と呼はるにぞ、あつと答へ

て白洲しらすの内うち、直なほす梯子はしごを見るにさへ、心は上のほる枕まくらの横よこ樋づち、底そこのかだへの井戸屋形みどやかた、深ふかくも軋きしる絞車くるまきの、胸ひねに響ひびきて氣を冷ひやす、阿古耶やこやが心の濁水にごりみづ、今しも呑のむやと覺悟かくごの體てい。重忠庭にはに下おり立つて、「ア、仰々ぎやうぎやうし靜しづまれく、阿古耶やこやを拷問せめだうぐの責道具せめだうぐは、某それがしかねて拵こしらへ置きたり。誰か有る持參ちさんせよ」と、仰おほせに隨したがひ持出づるは、最も優やさしき玉琴たまごてに、三絃さんせん胡弓こきう取添とりぞりそへて、音ねゞも嘸さあと白洲しらすなる、阿古耶やこやが前に並ならべ置く。岩永いづみも恟ぎやうとせしが、様子やうす如何いかと打うちまもれば、「是せんさ女なん、其その琴彈こてひけ、重忠じうちが是こゝにて聞きこく」と、刀かたなの杖つゑに願ねが持がたせ、「岩永殿いづみどのもお聞きあれ」と、打解うちざけて見えければ、「こりや何なんぢや興きようがるは、責道具せめだうぐ々々くくと、何なんぞ嚴きびしい事ことかと思へば、エ、聞きこえた、拷問ごぎよに托たくせ、自分の慰なぐさみ氣晴きはらしをやらるゝな。天下てんかの政道せいだうを取捌とりさばく決斷けつだん所しよでの琴三絃こごさんせん、神武じんむ以來この無ない圖ずなほたへ、實じつに誠世界まことせかいの有様ありさま、天に口なし人を以て言はしむとは今思ひ當つた。阿古耶やこやめが懷胎くわいたい、もしもや此子このこが女の子なら、琴こてでやぐわんく、三絃さんせんでなんとやらと、京中きやうちゆうが諷ふうひしは此前表このぜんべう、此上の破れ次手ついで、ちよくけなんどもよござんしよかの、ハ、ハ、ハ、ハ」と嘲哂てうしやうす。重忠耳みみにも入れ給はず、「ヤレ阿古耶やこや、なぜ初めぬ、琴こてを彈ひかねば景濟けいけいが所在ありかを言ひ明あかす所存ところんか」と、詞ことばもしけき重忠じうちの、底の心は知らねども、是非けがなく對ひかふつま琴こての、行衛ゆくへを何なんといはこすに、絲いとも心も亂みだるゝばかり、聲こゑも枯野かれのの船ふねならで、かひなき調しらべかき鳴らし、「影と

云ふも月の縁、清しと云ふも月の縁、かけきよき名のみにて、映せど袖に宿らず」重忠耳をそばだて給ひ、「今彈ぜしは露組の唱歌を我身の上に取り、景清が行衛知らぬとな。まア知らずんば知らぬにせよ、して景清と其方が、馴初めしは何時の頃、如何なる事の縁により、深い契りの中とは成りしぞ」「是は又思ひ寄らぬ變つたことのお尋ね、何ごとも昔となる恥しい物語、平家の御代と時めく春、馴れにし人は山鳥の、尾張の國より永々しき、野山を越えて清水へ、日毎毎の徒詣で、下向にも参りにも、道はかはらぬ五條坂、互に面を見知り合ひ、何時近付に成るともなく、羽織の袖の綻び、ちよつと時雨の傘、お易い御用、雪の晨の煙草の火、寒いにせめてお茶一服、それが高じて酒一つ、此方に思へば彼方からも、功德は深い觀音經、普門品第二十五日の夜さ必と、戯れの詞を結ぶ名古屋帶、終なければ初もない、味な戀路と樂しみに、壽永の秋の風立つて、須磨や明石の浦舟に、漕ぎ放れ行く縁の切れめ、思ひ出すも瘡の毒、ア、疎まし」と語りける。「オ、さも有りなん情の道、聞届けしが詮議は濟まぬ、この上は三絃彈けい」「エ、イ」「いやさ、此方の尋ねる仔細を聞かぬ内は、何時までも」と、猶望まるゝ三絃の、どう成ることか知らねども、思ひ込んだる操の糸、今更何とたがやさん、心の天柱引きしめて、「翠帳紅閨に、枕並ぶる床の内、馴れし衾の夜すがらも、四門の

跡夢あとゆめもなし。去さるにても我われつまの、秋あきより先さきにかならずと、あだし詞ことばの人心おんしん、其方そなたの空そらよと眺ながむれど、それぞと問とひし人もなし」「オウもう好よいは、三絃さんぜんやめい、班女はんによが閨ねのかこちぐさ、絶たえし契ちぎりの一節ひてふし、時に取つての一興いっけいながら、分疏いひわけは暗くらい。西海せいかいの合戦いっのちに命いのちを遁のがれ、都みやこに折々せり／＼紛れ入る景清けいせい、其方そちは度々たび／＼逢あはうがな」「平家御盛たいけごうさかりの時ときだにも、人に知られた景清けいせいが、五條坂ごでうざかの浮女うかれめに、心を寄すると言はれては、弓箭ゆみやの恥はぢと遠慮えんりょがち、殊更ことさら今は日陰ひかげの身み、妾わかしはもとより河竹かはたけの、有るが中なかににも無情つれない親方おやかた、目顔めがほを忍しのぶ格子かうしの先さき、編笠あみがさ越しに健まめに有つたか、アイお前まへも無事むじにと只ただつた一口、言ふが互たがひの比翼ひよく連理れんり、さらばと云ふ間まもない程ほどに、忙せはしない別路わかれは、昔むかしのきぬぐり引きかへて、もめんぐと零落おちふれし、身の果哀はてあはれな物語ものがたり、アとおはもじ」と差俯さしうつ伏ふく。「いかさま是こゝは斯かくもあらん、景清程けいせいほどの勇士ゆうしなれども、實じつに色いろは思案しあんの外ほか、思案しあんの外ほか、如何いかう思案しあん仕直しなほしても、此通こゝりでは濟すまされぬ。それ胡弓こきうすれく」「あい」と答こたへて氣きは張弓ちやうきう、歌うたは哀あはれを催もよほせる、時の調子てうしも相あの山やま、「吉野龍田よしのたつたの花紅葉はなもみぢ、更科越路さらしなこしちの月雪げつせつも、夢ゆめと覺さめては跡あともなし。あだし野のの露鳥邊野つゆどりべのの、烟けやりはたゆる時ときしなき、是こゝが浮世うきよの誠まことなる」誠まことをあらはす一曲いつきよくに、重忠むねただほとんど感かたに堪たへ、「阿古耶あぐよが拷問がうもん只今限り、景清けいせいが行衛ゆくへ知らぬと云ふに、偽いつはりなき」と見届みとどけたり、此上こゝには構かまひなし」と、仰おほに阿古耶あぐよは忝かたじけなけ涙なみだ、盡つきぬお禮れいを伏拜ふしをがめば、「ヤア

「ヤア／＼重忠、白いとも黒いとも片付かぬ詮議を、阿古耶めに偽なしとは、何を以て申さるよ、此岩永は呑込まぬ、不埒々々」と云ひほぐす。「オ、其仔細い／＼聞けん、鼓は五聲に通ぜずといへども、糸竹の調は五音四聲に能く通じ、直きを以て調子とす。曲り偽る心を以て此曲をなせる時は、其音色亂れ狂ふ。就中此琴、音有る物の司として、人の心を正しうし、邪を禁しむると、白虎通にも賞じ置きたり。ことをもて重忠が、女の心を引見る拷問、十三の絃筋に、縛り絡めて琴柱にくどめ、科の品々一より十迄、とるぎんするを曲事とは申されまじ。琴の形を堅に見れば、漲り落つる瀧の水、其水をくれる心の水責、三絃の二上りに、氣を釣上ける天秤責、胡弓の弓の矢殻責と、品を換へ責むれども、いつかな亂るゝ音もなく、調子も時も相の手の、祕曲をつくす一節に、彼が誠はあらはれて、知らぬことは知らぬに立つ、調べを糺して聞取つたる詮議の落著、此上にも不審有るや」と、道理に叶ひし詞のしらべ、ぴんともしやんとも岩永は、撥鬚頭かくばかり、眞面目に成るぞ心地よき。重忠重ねて、「阿古耶が詮議落著といへども、猶此上に、某が尋ね問ふ仔細有り、随分勞り屋敷へ引け」と、仰を蒙る榛澤六郎、「いざ阿古耶立ちませい」と、伴ふ情數々の、恵を思ふ女心、「有りがたう存じます」と、詞につきぬ悦び涙。岩永は拍子もなく、調子に乘らぬ勃と頬、秩父は宮商角徵羽の、五つに叶ふ琴

三絃、かしこき例引いたりちよつかい、ばち利生有る糸さばき、直なる道の三重言の葉や。侘びぬれば、親慕ふ子の片翹、身を立てかぬる音をぞ泣く、憂き身を此處に岡崎の片邊、伊庭十藏一幸が、老母を養育む藥屋の軒、母は何をか思ひ寐の、彼唐土の顔回、樂みは似ぬ臂枕、世に附合ぬ氣散じは、引立つる戸の隙間より、風のみ通ふばかりにて、稀に言問ふ人もなし。憂節を身に添持ちし釣竿の、いとま有りけに見ゆれども、母の一人居氣遣と、心は急ぐ伊庭十藏、腰には簀の重たきを、足元からく立歸り、「ハア是は母人、何時にない晝寐なされしな、定めて妹が身の上を案じ寢の、夢程もお心休めは珍重々々、此間に釣た此鯉を調味して、御膳上げん」と取出す、片足たらぬ組板も、元浪人の鍔庖丁、棚からぐわつたり落ちたは何んぞ、其響きに目覺めて母は起上り、「ヤア十藏戻つてか、何として遅かりしぞ。阿古耶が彼の身に成りしより、講釋も打ちやめ、一寸内を出ぬ人の、適の留守なれど、心細う待ちかねる、今日は先何處へぞ」「さればふと存じ付き釣に参り、御覽なされ、此鯉を二こんまで、終に覺えぬ獵の利きやう、是も母人御息災延命の徴と思へば、大分嬉しう存じます」と、聞いて不興し、「何、釣に往て其鯉取つたか、それが母が息災延命の徴だ。是は又十藏とも覺えぬ、常さへ母が嫌ひの殺生、殊に阿古耶が今の苦しみ、人並に世を経る我ならば、其處の祈彼處の祈禱、生有る物

の命を助け、慈悲善根の果でなりとも、助けたい此時節、面白さうに釣どころぢやおぢやるまい。かはいや其鯉が和御前に釣られ、俎板に乗る苦しみも、阿古耶が六波羅で責めらるゝ苦しみも、人と魚との名は違へど、苦しむ所に二つない。鯉のお陰で息災延命、おりや否でおぢやる。年頃日頃の孝行も、愛想もこそそも盡き果てし」と、身を捻ぢ背けて恨み顔、「左様に思召さば、御叱御尤千萬、全く慰の釣殺生に候はず。阿古耶が事に頓著有り、御忘れなされしか、今月今日は御誕生日、浪人の後も形のごとく貧しき中に、頭尾の有る鹽物なりとも調へ、目出たうお盃頂戴致さぬ年もなし。殊に今年にはや七十二、祝ひは申し納め、來年の今日は不定の世の中、相かはらず祝ひ奉らんと、此間心懸くれども、遠慮で講釋は仕らず、雜魚一疋調へん價に盡き果て、殺生とは存じながら、小鮒でも釣つて御肴にと存じたれば、御覽の如く三年物の鯉二こん、鯉の鱗は三十六枚有ると申す、二こん合せて七十二枚の鱗、母の御年も七十二、都合目度う、是で母の誕生日を祝せよと、八大龍王の賜と、嬉しく持つて歸りし。十藏も木石てすら、詞には出さねども、たつた一人の妹が苦しみ、母の歎き悲みが悲しかるまいか、思ひやつべたな母人」と、歎かば母の歎きぞと、泣かでこまぐ語りける。「なう恥しやサア十藏、早う其鯉料理して、母が誕生祝うてたべ。悔しや叱つた佗言に、悲しい中で莞爾と、笑うて膳がいたど

きたい。雪の中の筭氷の魚、唐土人の孝行にも、劣りはせぬぞやれ十藏、とは云ふ物のいぢらし
 けに、鱗の數と我年と同じ年、如何にしても殺されまい。御身が出世も此鯉の、龍門の瀧を上る
 ごとく、あやかつて命助けてやりや。コレ此盆を斯うすゆれば、幸ひ蒔繪の鶴の料理、心で祝ふ
 千代八千代、親子目出度う盃せん、ア、酒がな」と有りければ、「ハア詭言とは勿體ない、お心
 とくれば此上の大慶なし。酒も則ち用意せり」と、須の内より取出す、徳利に餘る悦び貌、「と
 にもかくにも御心に、背かぬを今日の御馳走、ヤ亭主方ま一人有る」と、下屋に駈け入り、羽織
 片手にあたふた計の食籠も、土盞に事のかげ盃、わびしき中に假初も、禮儀亂さぬ親と子の、昔
 の育ち奥床し。「ハア是は懷しや、景清の御身にもらはせし羽織ならずや」されば其時申せしは、
 是を打懸け、景清が孝行も一所と頼み置きたれば、此座に置けば是は景清、今日の壽、亭主二人
 と思召し、先盃お取上げ、いざお酌仕らん。日頃は聞こし召されねど、今日は半盞、ハア忝
 い忝い、酒は愁の筭と申せば、暫しもお氣晴し、其お盃サア景清戴いて、直に返進申さし召せ」
 と、言ふも酌ぐも形ばかり、「さらば盃お取次、肴はなくとも舞殿の盃、まあ錢の廻り程、是
 はく、つぐまいと存じながら又半盞、したり、靜にはあがらいで、誠に下戸の無意氣呑、す
 ぐに私御頂戴、手酌は恥の物、是御覽ぜ」と、さらりと酌んでついと乾し、「憚ながら又返

進、御酒は御氣根、毎年謠ふお肴、今年缺かんも心がかり、世上の聞えも候へば、随分と聲低に、謠母は千代ませく、と縁言を、祝ひ謠の、謠面白の時代や」母「嘉例の肴めでたいく、取るぢやに母も一つ受け、呑むことはならず、是れつけざし」「ハア是は有りがたい」と、戴きくずつとほし、「然らば御意に任せ盃は是まで、餘り御機嫌好いに付き、近比不孝な願ひなれども、申上げて見ませうが、御聞分け下され」と、飛退去つて手をつかへ、「阿古耶が今度の苦しみは、景清に縁を結んだる故、というて重々の大恩有る景清が行方、知つても云ふまじ、況て存ぜねは、責殺さるゝは案の内。私つくぐ存するに、阿古耶が腹はナ、是々と承る、いかなく殺させては、母も我も景清に、何と面を合すべき。然れども力わざには動しも助けもならぬ、所を何の苦もなく助ける、極上々の分別を極めしは、某阿古耶が責められし彼阿古耶の松と京童の異名を付けし六波羅の松の下にて、腹十文字にかつさばき、上總の七兵衛景清運命拙く、とても頼朝を討つこと叶はぬ故、腹切つて相果つる者也。如件などと、似つこらしく書置を残し相果てば、ヤレ景清切腹する上は、阿古耶に用なしと命助くるのみならず、京都鎌倉心をゆるせば、油斷を窺ひ景清殿、易々と本懷を達せられんは、掌を見るが如し。一日切腹を急げば一日妹が苦患を助ける、疾つく申上けんと存ぜしかども、親子一世の此世の別れ、せめて快う御

誕生日を祝ひ納めて後の事と、今日まで色にも出さず、思ひ初めし其日より、一日を千日萬日と、のツつ反ツつ待ちかねし、今日只今より、誰か我に代つて勞はり養育み奉らん。尤妹は有りながら女の事、片々の手の落ちた様に思召し、歎きが積つて御身のくづをれ、それが高じて又妹が悲しい目を見ようかと、案じ繼ぐれば身も世もあられず、悲しけれども、初から無い十藏ちやと思召し諦め、不孝の罪をゆるされ、命のお暇下されば、有りがたからん」と跡云ひさし、胸までぐツぐと突懸くる、涙知らせじ泣き顔見せじと差俯伏き、疊に喰付き願ひける。母は萎るゝ氣色もなく、「ヤレ其詞遅かつた、十藏、今日は云ふか、晩には云ふかと、毎日々々待ちかねて思ふには、心が付かぬか、いや抜かる者でもないと、心の内でとつおいつ、親子の中も侍に、死ねと教ゆるは恥も有り、遠慮も有る。何時云うてくれることぞやと、今まで和御前が立身出世を待つたやうに待ちかねし、母は誰が無うても、飢ゑもせず凍えもせぬ。況て妹が居るからは、跡案じること微塵もない。未練な心を残さずとも、潔う腹切つて、景清の恩も報じ、妹が命も助けてくれ、というとして妹が助けたさに、死ぬと云ふでは更々なし。端折かどみの眞實の我子兄弟、月日と力に暮せしもの、夜ばかりがよからうか、晝ばかりでよからうか、夜晝があればこそ立つ世の中に老の身の、可愛さに隔てはなけれども、妹が腹には男孫か女孫

か、御身が爲には甥か姪か、胤は景清の預り物、それ殺すまいばかりに、死ねと云ふ合點か。幸ひと其盃、又歸る旅なれば、母が呑んでさすべきが、再び戻らぬ死出の盃、一つ呑んで母にさせ、進ぜん」と立上り、胸と一所に踊る鯉を鉢に入れ、十藏が前に据ゑ、「今死ぬる身に入らぬ咄なれども、物は聞いて置かうこと、わごぜが祖父様、妾を縁に付け給ふ時、切腹人の今際には、鯉の濱焼をするゑ、飯櫃の蓋で給仕すること故實なり、聞いて置けと物語、人の上でも有ることか、我子の役に今立つた、此鯉の今日釣にかよりしも、思へば天の與へぞや、祝うて居わつて早う往て、奇麗に死ね、さらば」と目を閉ぢて、重ねて詞もなかりけり。「ハア有りがたや、望み叶ひし我大慶、死後の見苦しからぬやう、とてもものにさつぱりと、自剃に月額仕らん。剃刀砥石は何所に」と尋ねれば、「オそれよからう、今生未來の晴れの月額、母が剃つておませうぞ、髪揉みやれ」「こは冥加なや、生々世々の御形見、辭退は仕らぬ」と、盥取る間も有りやなし、走の水にさしかゝれば、母は末世の手本となれ、武士の龜鑑と鏡立、砥石剃刀携へ出で、磨ぐも磋くも弓取を、子に持つ親は皆これと、思ひ流しの合水、今日別れては逢ふことの、鐵よりかたき合砥や、力なみだを押包む、袖よ袂よ手合せし、「サア十藏」と有りければ、思ひ亂るゝ黒髪を、揉んで鏡に打向ふ。母は後に立廻り、「なんと十藏、親が子供

の髮剃は、ほんの月額、逆剃にせうかいの「アいや、若い先立つも老いたるが残るも、此方こそ逆さまと存すれども、皆前生から定つた、直剃になされ下されかし」「オ、心得し」と老手の、顫ふを見せじ顫はじと、二剃三剃顔と顔、互に移る鏡の内、「いやなう十藏、幾歳に成つても面影の、残るは昔の幼顔、あてにならぬは額の黒子、見通しの法印が、六十八まで請合ひし其命、まだ半分も立たず、こんな事が有らうとは、神佛のなされた八卦にも、間に虚があるかい。ハ、ハ、ハ、をかしいことでは有るはいの」「いや私は八卦の合はぬを、いかう嬉しう存じます。先年國元で御大病お煩ひなされた時、百人の醫者は百人、陰陽師山伏、名僧智識の占にも、御本復と申す者は一人も無かりしが、御快氣に間もなく七十二まで御息災、此様な目出度い事はござりませぬ」「オ、言やればそれもさう、其時參つたら、今日廣い國へ主づいて行きやる嬉しい月額は剃るまい物、長生してこんな目にあふめでたいぞや。ヤ何か云ふ間に時うつる、月額剃つて仕舞はう。ホ、こりや何時の間に揉直しやつた」「いや揉直しは致しませぬ」「でもひつたりと濡れて有る」「それはお前の」「あの虚はいの、おれが何んの、微塵も泣きやせぬ」と、言ふ聲曇る鏡の内、互に顔を見合せて、笑ひを作る氣は立つる、老の手業のかよわきも、剃刀早に剃りなせり。「是からは聲の景清殿、大國の所知入

れ、まさかの用と嗜みし、晴小袖召させん」と取り出す、心の闇の眞黒々、縞隠れ行く伊達羽織、行長合ひてのつしりと、大小さすが浪人の、昔輝く金作、十藏、忽景清と、見かはず計り見えにける。物數言はど老人の、もしや心も亂れんと、門に出で、「是まで養育の御恩、海に比ぶれば蒼海淺く、山に譬ふれば須彌山低しと申せども、命は又義によつて輕しいへり。妹がことは申すに及ばず、申上げたき數々は來世の事、日の内は清水に暮し、切腹は暮六つの鐘を限つて、逆さまなことながら、御回向頼み奉る」と、云捨てつゝと走り行く。母はつゞいて走り出で、「ヤレしばし待て物言はう、おういく」呼べど答へず、弟も、涙と年の疎き目に、其行方は見えざりけり。あつと大地に伏轉び、「鬼にもせよ蛇にもせよ、死に行く子を往て死ねと、歎かぬ親の有るべきか。女なれども侍の、親に生れた身の因果、泣きたいを得泣かず、理窟言うたり笑うたを、誠の心と思ひしか、狂氣半分半分は、死んで居たはやい。扮装つた姿いつ忘れう、千騎二千騎の大將と仰いでも、不足ない子を可愛やな、一生貧苦に埋もらせ、鎧甲著せなんだが悲しい。いつそ不孝に有つたらば、是程に思ふまい、孝行にしてくれたが、今では結句恨めしい」と、涙の限り聲限り、泣いてはくどき立つては轉び、やる方なみだに伏沈む。かゝる所へ榛澤六郎成清、阿古耶を駕籠に勞はり來り、「ヤアく老母、阿古耶

の身の上詮議落著致すによつて送り歸さるゝ、併し胎内に子を宿せば、平産までは他國叶はず。男子出生ならば決斷所へ訴ふべし、女子においては構なしとの説意なるぞ」と、阿古耶を引いて渡さるれば、「なう懷しや母様」と、縋り付いたる嬉し泣き、母は仰天氣を狼狽へ、「ヤア健で戻つたか、嬉しやの悲しやの、こんなこと知つたら遣るまい物、六波羅は何方ぞ、まだ十藏が日は暮れまいか。よう戻つてくれたな、入相が死んだら何とせう、兄が鐘は鳴るまいか」と、何を云ふやら氣もそとろに、餘所には鳴らぬ暮六つを、胸にごんくつくばかり。「母様それは何おつしやる、いかいお世話、六郎様へお禮く」と氣を付くれば、「ほんにく」と手を合せ、伏拜むより外ぞなき。「オ、久々にての對面、うろたゆる程嬉しい筈、阿古耶を渡せば他に用なし」と六郎は、下部を引具し立歸る。「母様悦びは道理ながら、其様に何故うろくなされます」「うろくせいでは、兄は腹切りに往つたはやい」「エイそりやまア何所へ、何として」と驚けば、「和女の命助けう方便、景清に成りかはつて、六波羅の松の下、日の中は清水で暮し、入相の鐘と一時に腹切る筈。ヤ斯う言うては居られぬ」と、駈け出しては挫と輓け、嘆きに弱る足弱車、阿古耶悲しさ遣る方なく、「戻ると其儘何故云うて下さんせぬ、女の足でもつい一走、わしが往て暮れぬ内、兄様つれまして立ちかへる」と、はや駈出すおのが名の、阿古耶

の松へと急ぎ行く。爰に過ぎつる元暦元年、源平の戦ひ壇浦にて、上總の七兵衛景清に出會ひ、不覺をとりし源氏の侍、箕尾谷の四郎國時、其身の恥辱を顧みて、陣所に歸らず、直に逐電してけるが、景清世に存らへ、都にさまよふと聞きしより、鬱憤を遂け、弓箭の恥を雪がんと、所在を探す京巡り、今日しも此處を尋ね來り、扇の端に書付けたる、心覺え開き見て、「ムウ岡崎の村はづれ、北を受けたる一軒屋、西に藪垣、入口に井の字の印、あるぞく」と打首肯き、内の様子を窺へば、主の老女が年格好、是こそと突と入り、上り口に踞け、「ヤア老女、阿古耶が母は儕よな、聲の景清、八島の浦にて箕尾谷と軍物語聞き及ばん。我こそ其箕尾谷四郎國時、景清が所在を探す、又鎌倉よりも詮議厳しく、秩父岩永が承り、阿古耶に所在を責問はる所、白狀せしともせぬとも取々の噂、それはともあれ、儕が知らぬことよも有るまじ、眞直に吐かせ、知らぬなどと僞らば、皺首捻ぢて言はせん」と、威しかよれば恟として、イヤ知らぬとも存じたとも、兎角の返答呆れ果て、顔を眺むるばかりなり。彼奴知つて啞けるか、荒氣では行くまじと分別し、面色を和らけ、「老女こゝを合點せよ、箕尾谷慘い心持ちたれば、無體に連れ歸り、人質に取り景清が心を盡らせ、聞出す仕様も有る。又すつぱりと切殺し、景清が外姑の敵と名乗つて出る仕様もあれど、咎ない人を殺し、卑怯を働く我ならず。手近う言へば

阿古耶殿と縁が切れ、退けば他人の景清、身はくづれうと隠し遂けうと、思ふは五十年先の氣質、當世は川流、さらりく、合點かお袋」と、氣を寛させたらしける。「ムウ、合せ物は離れ物、言はしやれば其處も有る。當代は昔とちがひ、弟子の器量のあるなしも構はず、弓矢打物の大事さへ、金次第で傳授するけな、氣のさばけた世ぢやござらぬか。水心あれば魚心有る、問様に心あれば、教へ様にも心が有りさうな物の様に思はるゝぢやござらぬか」と、詞の謎をとく吞込み、路銀の財布取出す。ぢつと尻目に懸けながら、猶見ぬ顔の空とほけ、「いやなうお袋、知らぬ所へ初て参り、踏荒し煙草を荒し、忝い」と一包、膝元にそつと置く。苦もなく取つて指先に捻つて見、「誠に是は茶の金さうな、戴く程の重みでもなし。コレ人の所在を訴人すれば、囑托の大法さへ判金七枚に極まつた世の中、茶の錢ばかり何故極らぬでござるぞいの」「おつと茶の金香込んだ、判金七枚」と、財布の包取出し、前に竝ぶる折こそあれ、阿古耶十藏に尋ね逢ひ、互の悦びいそぐと、立歸る庵の内、見なれぬ武士に見なれぬ小判、這は如何にと、迂濶に兄弟得這入らず、内の様子を窺ける。箕尾谷悦び、「サア望みのごとく此金を渡す上は、景清が在家を知らせ、我に討たせ、此箕尾谷が願かなへてくれ」「オ、神佛より貴い金を大ぶん取るからは、教へませいでなんとせう、上總の七兵衛景清が所在は爰に在り」と、十藏大音

聲に呼はつて駈入り、「ヤア珍らしと箕尾谷、見忘れしか、壇の浦にて見参せし景清、汝弓箭の恥を思ひ、付狙ふとは疾く聞いたり。今廻り逢ふは優曇華、鬱憤を晴らせ、相手に成つて得さすべし、サア抜け、勝負」と詰めよつたり。敵に詞をかけられて、箕尾谷なじかは臆すべき、拔放さんとはしつれども、壇の浦の戦は、互の姿甲冑の、昔にかはる形姿、それかあらぬか訝しと、躊躇ふ氣色、十藏焦つて、「ヤレ臆れしか箕尾谷、又臆病が起りしな、性根を付けてくれんす」と、閃りと抜いて打ちかくる。母も阿古耶も心暮れ、わつと叫び泣くばかり。兩方互に秘術をつくし、打つぞと見えし十藏が、刀の金や冴えたりけん、鏑本よりほつきと折れて飛びちつたり。十藏柄をからりと捨て、「景清が運命はまでなり、サア首打て」と指しのぶれば、「オオ神妙なり景清」と、振上ぐる刀の下、眼を閉ぢたる頼魂、つくぐと打まもり、「ムウ、主君の仇を報ぜんと、鎌倉殿を狙ふ景清、刀が折れたらば指添も有る、命の懸換も有る様に首さしのべしは、ムウ、いや、いや、箕尾谷が一腰は、正眞の景清が首を打たでは叶はぬ刀、紛者には得汚すまい」と鞘に納め、「儕、景清まう取り置け」と、一分別有る其の有様、一器量有る男子なり。母は手を打ち、「オ、好い分別や眼力や、其男は十藏と云ふ我息子、誠の七兵衛景清が隠れ住む所は、清水の後堂より、本堂へ是斯う廻る左の方」と、折れたる刀押取つて、

ぐつとツツ込み、乳の下かけて引廻す。「悲しや是れは」と驚きさわぎ、「そも何故の御自害」と、兄弟縋り取付けば、こはく如何にと箕尾谷も、呆れ果てたるばかりなり。母は苦しき息ながら、「やれ兄弟よ、其金を路銀にして、景清の所在を尋ねに、母が命の有る内に、ちやつと往けく。ア、嬉しや、まんまと仕おほせた。斯う云うたら箕尾谷様、嗚やさぞ憎からう、身を切刻み碎かれても、元より知らぬ景清の所在、數へやうと偽しは、兄弟を尋ねにやる路銀に金とらう大騙瞞大盗人、あの婆々め寸斷々々にもと思し召さうが、かはゆうてく何うもならぬ子供の爲掣の爲、騙瞞に成つて死ぬる母が心、子を持つて後思ひやり、其時恨を晴れてたべ。ヤア兄弟よ、千日千夜云うても名残は盡きねど皆仇言、かまへてく心を合せ、景清を見立てくれ。是を云うてしまへば、心にかうること浮世にない」と、詞は涼しく、心は弱る息も切れ、此世の別れと消えはつる。阿古耶は更に夢現、辨へ知らず取亂し、わつとばかりに伏沈む。十藏は箕尾谷に、泣面包む櫛紅葉、胸は時雨よ雨や小雨、岩木ならねば箕尾谷も、敵は敵金は金、死なずとも是しきに、了簡も有るべきを、不便の母が最期やと、餘所目遣ひも頼もしき。やと有つて十藏金押取り、物をも云はず箕尾谷が前に置く。箕「オ、返辨の心尤なり、此上は遣ると云ふともよも受けまじ」と、立つて死骸の前に置き、「七日々々の弔金、七々四十九兩の香

典、死人に手向ける上からは、禮を受けう様もなし、恩にもきせぬ來世金、受け悦んで成佛あれ。扱某は参り申す」と立出づる。「ヤア、箕尾谷、母に手向の情はあれども、景清を狙ふ御邊なれば、此十藏何時までも妨げ入れる合點か」「オ、言ふにや及ぶ、老母が愛心に免じ、狙ふまじ討つまじと云ひたけれども、我も根井の太夫と云ふ親有り、我ゆる江州へ蟄居の身、景清を討つて會稽の恥を雪がすんば、孝行も武道も立てがたし。汝等兄弟景清に廻り逢はど、斯く付狙ふと云ひ聞かせ、必ず用心怠るな」「オ、サ十藏が頬を篤くと見置き、人違へして悔むなよ」「何さく、千體佛程あるとても、一念の眼力、誠の景清討つて見せうぞ」「見事討つか」「儕見事妨ぐか」と、思はず兩方反打つて詰懸くる。阿古耶立出で、互に宥め宥められ、別れ出づるも止まるも、共に甲斐なきはよき木の、有りとは見えてなき骸を、古い葛籠に法の道、心は網代の葬禮興と、兄が歎けば妹は、まそつと貧しい野送りでも、燈籠なりとも有る物をと、暗む心の燈火を、法の光にかき立てて、泣くく荷ひ諸聲に、爾時無盡意菩薩、即從座起偏袒右肩、合掌向佛而作是言、世尊觀世音菩薩、大慈大悲を引導に、此世を離れ行く旅と、人を尋ねに行く旅と、道は二筋かはれども、涙はひとつ一筋の、誠の道こそしるべなれ。

第 四 道行旅寢の添乳歌

榊木はつきぎの、有ありとは見えて逢あはぬとは、代々よゝゝの眺めながめの種たねなれど、我わが身み一つは無情つねなきと、思おもふ心の松まつの名なや、世よにも阿古耶あこやが夫思つよおもひ、勤つとめの中の誠まことより、まうけし胤たねの稚櫻ちぎざくら、初はつの子持こぢのかいしよなき、姿すがたを人の譏そしり種ぐさ、さがなき口もおのづから、七十五日はや立ちて、今日けふ忌明いみあきの壽ことほきや、産神詣うぶすなまうでに假付かづつけて、餘所よその人を尋行たづねゆく、當所あてきも長の旅なれど、つい菅笠すしがきに草履ざすりかけ、案あんじるよりもやすくと、思おもへば輕かろきさんでうの、橋はしも後に遠うしろざかり、京みやこの名残なごりと見返みかへれば、跡あとに追付おひつく十藏じうざうが、日傘片手ひがさかたてにふりつゞみ、まだ玩弄物あそびもの知らぬ子に、甘あまやかしかる叔父様おぢさまと、互わに笑わらひあはた山やま、越こえてぞ此處こゝに追分おひわけや、大津繪召おほつるめせと旅人たびびとの、心をしばし繋つなぐにぞ、さてし惜をしまぬ膳所ぜんじよの町まち、瀬田せたの長橋ながはしかゝる身の、重おもき思おもひを祈いのれとや、そなたに立てる石山寺いしやんじ、南無觀世音菩薩なむくわんぜおんぼくさん、大慈大悲だいじだいひの惠めぐみにて、刃やいばに沈しづむ母上ははあふの、未來みらいの闇やみも晴はれ渡りわたり、眞如しんにょの月の彼の岸きしに、迎むかはせ賜たまへと伏ふしをがむ、袖そでも露つゆけき春の野のに、おのが在所ありかを知しれよとて、妻戀つまこふ聲こゑはけんくほろと、子を思おもふ身はねんくころと、泣なくかな泣ないそ我わがふところに、遅々ちぢたる春はるの日影ひかげを受うけて、育そだて上げなん姥うばが餅もち、草津くさつを早く出離でなれて、右と左へ二筋ふたぢの、道みちは別わかれし我夫わがつまも、近江

とばかりしらま弓、何處をさして行きなると、案じ迷ふも道理なる。十藏ふつと思ひ付き、まだ幼き嬰兒の、心は正直正路にて、神や佛の恵にも、叶ふ御籤の氣結び、辻占とはんと立寄りて、心に右を尋ねれば、顔を自然と反向けたる、かぶりたこのよしなしと、又問うて見る左の道、につと笑顔の鏡の山、映る心にまかせんと、行く道もせは初花の、吹雪も深く森山の、梢残らず色めきて、いとしをらしき里の若嫁、小娘達か、春の物とて流行唄、唐も大和も、鄙も都も濡れの沙汰、サヨエえと優し、ちんないろく、オ、オ粹やく、宿は鏡の、男子和女郎がによす談合、サヨエ市河越て高宮の、町に鳥井の二柱、おたがじやくしの森繁み、遙其方と額づきて、夫の命長かれと、守袋をかけまくも、忝しとゆふつけの、鳥元の宿櫓橋、渡りくつて瞰上ぐれば、雲を縫ひ行く磨針の、峠遙に夕霞、旅の心の急しさ、一人打つたり舞うたりの、かはを過ぎ行く長繩手、たつ辻堂を目當にて、辿り行く身の便なき。住吉の橋の反つたは、大工からかや木からかや、木を削り、鉋かくれば、鉋からかも知らぬえ、知らぬ田舎も住めば又、我身一つの都ぞと、心の急ぎのばし置く、悪七兵衛景清が、人に不審を打たれじと、普請通ひに身を扮し、在所大工の中間に入り、背高々と異名を呼ばれ、流れ渡りの手間仕事、今日も朋輩打連れ立ち、普請場をはやさるの刻、暮るゝに遅き春の日の、ぶらくかしこに立歸る。

「ヤアたつた今までくわんくした空で有つたが、エ、聞えた、狐の嫁入のそばえ雨、晴らしていかう」と辻堂に、立ちよる内の高咄し。中に頭と思しきが、張肱かまへ分別顔、「おらが出入の仕事旦那、根井の太夫大彌太様、お名が大彌太といふによつて、滅多やたらの大屋敷、此度の御譜請は、鎌倉の頼朝様がお腰かけうと仰しやる故、物入構はぬ結構すくめ、正眞の名普請、皆も随分精出しやれ。手間賃はもうけ次第、ナウ背高、さうぢやないか」「いかにも此方の言はしやる通りぢや。扱あの根井の太夫殿は、何う見ても阿呆ぢや、それを何故といふに、鎌倉の頼朝様が、お腰かけうとおつしやるなら、つい上り口を一間程普請して濟むこと、それもやかましいに、床机一脚あてがうたら、ゆつくり腰はかけらるゝに、いかに金が澤山なとて、あだづひえな大普請、但し頼朝様のござるといふは、世間への言觸らしで、あの内にござる娘御に、髷殿取つて御祝言、其晴れの普請ぢやないか」と、餘所ながら裏問へば、「ハテ文盲な、お腰かけらるゝと云うて、常體の人間とはちがうて、頭さへ大きい頼朝様、腰の廻りは思ひやらるゝ、でつかちない物で有らう。此様なことで普請がなけりや、こちとが中間も立たぬてや。したがまあ悦びやれ、奈良の大佛は建立成り、是から段々興福寺の元興寺のと、大工の秋が入つて来る、近年にない搦み取、是といふも番匠の始り、太子様のお蔭、此度七堂伽

藍修覆に付き、大工中間一統に、手間を御寄進申すが、名々の冥加の爲、一年に六日づつ頭役に廻つてくる、おらが番に當つたら、戻り土産は名物の干蕪買うて來う」と、笑ひも哄つとはれ渡る、雨のあしもと弱々と、旅に阿古耶が兄弟づれ、濡れみ乾きみ菅笠の、辻堂にさしかよれば、互に見合す顔と顔、景清ちやくと、「エヘンく、はあ旅のお衆さうなが、雨に逢うてさぞ御難儀、まあ此處で緩りつと、日の暮るゝまで休んでござれ、お連も急かすとか」と、目で知らすれば吞込む十藏、「お詞に甘へて申しかねた事なれども、火打があらばお貸し下され、一ぶく吸付け申したし」「いやく火打は持ちませぬが、好い事を存じ付いた、幸ひ有合ふ檜の切、錐揉にして進ぜう」と、道具箱あぜかへせば、朋輩共口々に、「いや背高めが煙草の火で、旅の女中こまづける、あの抱いた子が目に見えぬか、歴とした男を鼻の先に置きながら、ふづくりかける大膽、猫の五器へお見廻ひ申す鼠ぢやまで」「それく、猫で思ひだした、口明いて居る蛭へ、ほでほしを突つこんで、迷惑するを見るやうな、構はずと置いて來い」と、笑うて皆々立かへる。跡は三人詞も口々、「ヤア是は無事で」「健固で」「よう健でゐて下さんした」と、阿古耶は夫に縋り付き、暫し涙にくれけるが、「なう此様に廻り逢ひ、御無事な顔何時か見ようと、只つた今まで案ぜしに、是と云ふも年頃日頃、觀音様を念じた驗、一つはいか

い兄弟の、お世話の甲斐で嬰兒まで生み、親子兄弟一所へ、寄るに付けても母様の」と、詞を
 残す曇り聲。景清外は耳にも入らず、「年よられたる母人、同道なきは第一の氣懸り、してく
 仔細は十藏様」「さればく、我母女には稀なる最後、いやもう是は順の道、仔細は阿古耶に
 のるく」と御聞きあれ」と、愁を餘所にくろむれば、景清はハアハツと膝を打つて「エ、残念、
 其日陰の身ならずば、都に在る内對面遂け、聾姑の御盃、せめて戴くものならば、是程には
 思ふまじ」と、男涙の線言に、阿古耶も今更十藏も、つきぬ歎を押しかくし、「扱まあ何から
 申さうやら、難儀の中の悦びと阿古耶が平産、あたり近所の介抱にて、漸とすくだたせ、産神
 詣でと偽り、京はすいと脱けたれど、貴方の行方近江とばかり、何處をしやうどと思ひしに、
 不思議にも廻り逢ふ天道の御恵、此上の珍重は、愛らしう生れた此子、手渡し申すが我等が土
 産、指似を置いてきたはそこもの細工のわざ、アレ彼の様ににくくと、笑ふ程にそだて上
 けたは伯父が自慢、是ばかりは恩に被てもらはにやならぬ」と、笑うて見すれば、「其元への
 御禮、景清が口では申さぬ、かくの通り」と頭を下け、手をつかへ、「扱出かしたは阿古耶
 が心底、六波羅へ引出され、拷問にあふぞとは、人の噂に聞きつれども、心に悔むばかりに
 て、憂き目を救ふしがもなく、無念の月日をくらせしが、今日只今廻り逢ふは操の徳、あつ

ばれ貞節過分々々」「なう其お詞たつた一つ聞かうばかりの辛抱、連添ふ女房に過分とは、勿體なや忝なや。此子も心に悦ぶやら、乳味さうに呑んうでるる、顔見てやつて下さんせ」と、云ふぞ妹背の誠なる。景清重て、「是なう聞かれよ、某が日比の願望、追付け成就の幸ひ有り、此長濱の片邊、根井の太夫大彌太が隠居屋敷へ、源の頼朝上洛の次手に立寄らんと風説、聞くとひとしく飛立つばかり、何とぞ根井が普請に入込み、事の様子を伺はんと、思ひ付くより俄大工、すうきを以て此程より、毎日普請に雇はるゝは、身の幸と悦ぶ矢先、方々に廻り逢ふも不思議の吉相、思ひ込んだる念を以て、根井が館の案内覚え、やすく狙ひ頼朝が首取つて、平家に手向けん七兵衛が積り普請、疊みこんだ胸の一圖、氣遣ひ有るな」と語るにぞ、「オ、潔し頼もし、それに付けて十藏が、一つの計略思ひ付きたり。是より某東國へ起き、頼朝が上洛の道中へ出つくはし、惡七兵衛景清と名乗つて狼藉に及びなば、供先守護の大小名、我討ちとらんは必定、景清は亡びしと、頼朝も心をゆるし、根井が館に入來らん、所を狙ふ誠の景清、本望をとけ給はど、繋がる縁の某まで、共に高名の數に入り、武士の大慶是に過ぎじ。阿古耶を御身に渡す上は、兎角の罅隙つひえ、是より直に罷り立つ。妹さらば、景清おさらば」「ア、天晴の心ざし、身を捨てゝの親切、此上は止むるとも、とまらぬ氣質の十藏殿、旅立の

錢はなひけせん」と、道具箱だうぐいばこの底そこよりも、隠かくし置おいたる一腰ひこし取出し、田舎大工ゐなかだいくの七兵衛しちべゑが、嗜道具たしなみだうぐの
 だん平物ぢらもの、鎌倉表普請ふしんの晴はれ、指さいてござれ」と差出さしだせば、忝かたじけなしと押戴おしだいき、腰こしにほつ込む讓ゆるの
 道具だうぐ、細工りうくさじらびは流々りうくさじらび侍さむらいの、名なを萬天まんでんに上普請あひふしん、勇いさむ心の内普請うちふしん、追付てけ手柄てがらを立て揃そろへ、家やわ
 たり粥がゆの豆まめの數かず、喰くひ當あて嚙かみ當あて高名たかせんと、心こゝろも似にれば形かたちも似る、二人ふたりが姿縁えんの蔓つる、瓜うり
 を二つの景清十藏けいせいじうざう、立別たちわかれてぞ三重みへ行水ゆくろづの、漣波うねなみの國くにとも詠よみし近津江ちかつうみ、所ところの名なさへ長濱ながはまと、
 御代みよを祝いはひし家造いへづくり、主あるじの心廣庭こころひろばに、移うつし植うゑたる糸櫻いとざくら、今いまを盛もりとはびこりし、根井ねいの太夫たふ
 大彌太だいみだが、隱居いんきょといへど古いにしへの、氣質かたぎは殘のこる大名普請だみふしん、數々かずく多おほき作事さくじの内うち、圍かこひは主あるじの物もの
 數寄ずきとて、物ものに念者ねんじやの根井ねいの太夫たふ、娼婢ちやうひに手傳てではせ、手づから結ひぶ壁下地かべしたぢ、「オ、オ、オ、是
 で葭簀よしず、此處このたけがしへ一本青々いっぽんせいせいと、此竹節このたけがしの付つけやうが至極しごく々々々々。こりや出來できた面白おもしろい」と、機嫌きげん
 にこくくわらび繩なは、しやんと結ひんでふつつり鎌かま、「既すでに指ゆびをやらうとした」と、差置さしおけば口々くく
 に、「遊あそばし付けぬ下々しもぐの手業てわざ、お慰なぐさめとは云いひながら、お怪我けがが有あつては、お姫様ひめさまのおきもじ、
 もう是こゝでお仕廻ししまひ遊あそばせ」「ムウわいらが事ことの道理だうりを知らぬによつてさ、此度このたびの普請ふしんはな、忝かたじけなく
 も鎌倉殿御上洛かまくらでんごじやくのお次手ついで、此爺このぢいが隱居いんきょへお腰こしかけらるゝ有難ありがたさ、壁下地かべしたぢでも自身じしんにするがせめ
 てもものもてなし、も些ちつとぢや手傳てでへ」と、又吩咐いひつくる主命しうめいに、いやとも伊豫簾携いよすだつぎへて、辛氣しんき

篠竹斑竹、纏ふ葛の永き日も、はや九つか普請場の、拍子木かちくゝ晝休み、槌も手斧もしづまれば、「ム、ウ普請小屋の晝食時分な、晩までもかゝらうと思うた此窓、半日には拂行き拂行き、扱此壁はどの左官めに吩咐けうぞ、數寄屋の上塗晴れの物」と獨り呟く目通りへ、小腰屈めて、「慮外ながら、此壁を塗らんず者、拙者ならで外になし」と、泥鰯ひらめかしすきみ口、壁訴訟とぞ見えにける。有合ふ女中笑止がり、「是々壁塗、殿様のお側近う、頭巾もとらず憚千萬、下りやくゝ」「ハ、アさすが女中とて、物の作法知らずぢやな、若衆の紫帽子、嫁御寮の綿帽子、虚無僧の編笠、左官の頭巾は脱ぐが不躰、脱がぬが禮儀でござります」と、云ふに大彌太打領き、「是はさもあらんこと、して其方は此間に見馴れぬ者ぢやが、今日初ての左官か、得て我が様なひやうけ者は、口ばかりで細工はあか下手、圍の上塗合點がいかぬ」「是はお情ない御一言、正眞の口も口、手も手と申すは拙者が事、先御細工の下地窓、見た所が地黄丸屋の看板形、水のへりによござりましよ。葎簀の模様は頼れ格子、此取合には瀟洒と、淺黄か桔梗か丁子茶か、栗梅花色濃鼠」と、言ひならぶれば、「黙りをぞ、姦しい、普請も未だ満てぬ内、頼れ格子とは忌々しい、彼奴明日から寄せなと言へ」と、以ての外の不機嫌に、言はれぬ數寄屋の壁塗より、晝飯の白壁頼つたが百貫優しと、左官は不首尾に内に入る。大彌

太元より昔人、只管氣にやかよりけん、「ヤイ女郎めら、此窓打頼つて仕舞へ、早く〜」と
 呵りの聲、奥へ漏れてや娘の白梅、する〜と立出で、「何事をお氣に違ひ、父様にお腹立て
 させます、是と云ふも、自が、お側に居なんだ第一の誤、様子は知らねどお機嫌直され、おこ
 ごの御膳氣をかへて、妾が部屋の庭の躑躅、咲いたもあれば咲かぬのも、有るが一種の御肴、
 酒事初めてお遊び」と、物知らかに詫ぶるにぞ、子にほださるゝ親心、顔色直して、「オ、そ
 りや氣が替つて宜しからう。惣じて心にかゝることは、祝ひ直しが大事の物。いやそれに就て思
 ひ出した、數多入り來る大工の中、人に優れて背の高い男め、つくぐ見るに細工の手捷さ、
 萬事物馴れた奴と見た、其奴呼べ、此窓の祝儀祝ひ直させ、心よう酒吞まう、其大工呼んで來
 よ」はつと答へる返事の内、「お召しなさるゝ背高めは私でござります」と、出合頭の拍子よ
 う、鉢巻取つてつくまへば、「あれ見たか白梅、先づ追取つて機轉利き、こりや背高近う寄れ、
 其方が育ち柄、都の生れと目利したが、此近江へは何故に來た」「是は有難いお尋ね、もと私は
 飛驒の國の出生、幼少の時分より、五畿内を經廻りて、去年より此お國へ引越して参りしが、
 此度の御普請は、頼朝様のお成とやら、お出とやら、其御造作に雇はるゝは、大工冥加に叶う
 た有りがたい事と存じて、微塵のらを仕らず、一服のむ煙草を半服に減じて、一無盡に精出し

ますれば、其御褒美に作料は、五人前づつ御拜領、頼み上ぐる」と願ひける。「成程々々、其方が言ふ通り、忝くも鎌倉殿、御光臨有べきと仰下さる有難さ、過ぎし比鶴が岡の八幡宮、御造営の御時、忝くも頼朝公、氏神への御馳走とて、御手づから石を運び砂を持ち、だんかづらを築き給ふ、其例しを思つてな、身も手づからの下地窓を、差別も知らぬ左官めが冗口、如何にしても心にかゝる、祝ひ直してくれまいか」「是はく、お易い御用、鶴が岡の縁につれて、此窓は龜の形、萬年の齡にて、内の段簀は吹寄せ格子、富貴を寄せると云ふ心、お庭の花は糸櫻、結びを長う頭をうなだれ、下々が靡き随ふ眞盛、お目出たう存じます」と祝儀をのぶれば、「出来た、こりや嬉しい。ヤレ女子共、此大工勝手へ伴ひ、料理喰はせ酒吞ませい、身も晝寢酒過さう、白梅來よ」と打ちつれて、ほたく悦び奥に入る。「サア御意の出た大事のお客、殿様御機嫌のひづみを直す大工殿、つゞくり普請の名人」と、女中のおどけ賑々しく、臺所へぞ通りける。憂しと見し、昔を今は慕ひ草、世を忍ぶ草しける身の、憂きが中にも妻や子を、心一つの寶の玉、阿古耶が名のみ甲斐もなく、辛き世帯を鹽鱈と、子持姿に古の、派手をくろめるお方振り、晝間の辨當夫の爲、運ぶ心ぞ誠なる。普請小屋差覗き、「細工場を未だ仕廻はすか」と、奥を見入つて伺ふ中、お臺所の御馳走に、顔の日和も好い機嫌、いそぐと出て來るは、

「コレこちの人ぢやないかいの」「ム、女房共か、坊か、よう來たなア」と手を取つて、「是は是はきつい熱、丸子でも呑ましたか。此様な事なら、晝飯持つて來るには及ばぬ、子の育て様が大よそな、以來をきつと嗜めく」「なうひよんな事言ふお人、どの様な寶にも換へまいと思つて、育上ける女夫が楽しみ、粗末にするとはなけれども、廣い世界を狭う暮し、大事を抱へた主のお身、大工の家業は是非もなく、朝内を出しましても、如何か斯うかと案じられ、晝の日あしを待ちかねて、辨當急ぐも顔見たさ、サア機嫌好う參つて」と、風呂敷包取り出せば、「いやく今日は晝飯入らぬ、思ひがけもない事が殿様の御意に入り、お臺所へお召しなされ、結構なお振舞、諸白を引受けく近年の榮耀、こちとが内のたんほ酒、賣場のちりとは違つた物」と、言ふ顔つれく打守り、「いとしばや時世とて、心も詞も品下り、昔には似ても似付かぬ姿容、思ひ出せば味きなや。人々多い其中に、御一門の用ひも強く、酒宴亂舞の座敷にも、肩を並べ膝を組み、さも羨まれた立身の、ほんに麒麟も老いぬれば、驚馬におとると云ふ譬へ、人に手を下げ機嫌を取り、わづかの酒を尊がり、諸白の賣場のと、昔は夢にも言はぬ詞、覺えさしやつた悲しさ」と、思はず啣つ憂き涙。「ヤイこりや何を馬鹿つくす、人に以前を芳しがらそと、男の外聞つくらひの僭上置いてくれ。假令誰も

聞かねばこそ、冗口やめて早う往ね、道でお尻を抓られな」と、おどけに紛らし目遣ひの、往ねよくに女房は、娘を抱いて立ちかへる。奥より主の聲として、「最前の大工、それに居るか、背高々々」と呼びかけて、庭に出づれば、「ハッ是は殿様、御用いかど」と畏る。「最前女子共へ吩咐けた、御殿へ見越す庫の窓の目塞ぎ、如何にしても鬱陶しい」「成程其儀は御意の趣、お臺所で承る、申さば僅のはした仕事、明朝でも致しましよ」「いや、年寄は氣が焦つ、今日中に仕舞つてくれい」「其儀なら只今」と、形に似合はぬ尻輕さ、彼處に置きたる道具箱、しやんと擔けて脚代の、十二の梯子大またけ、上る大工はさもなく、見上ぐる方の危なかり、心ぐれつく丸太の上、板は幾重の架橋を、遙奥へと歩み行く。大彌太はくく打首肯き、上の小袖脱ぎ捨つれば、下に腹巻軍場の扮装、袂より呼子の笛取出し、吹き立つれば、合圖に隨ふ日雇大工、上張なぐり立ち出づる、姿は勇々しき武士の、腰に捕縄十手携へ、大彌太が前に居並んだり。續いて内より娘の白梅、捕縄しやんと玉襷、長刀押取りすうわりの、腰も裳裾も引きしめて、心を配る二皮眼、凛々しくも又媚めかし。大彌太勇む顔ばせにて、「オ、潔し方々、本國信濃のよしみを忘れず、愚老が指圖に姿を扮し、力となつて給はる段、祝著せり」と禮儀を述べ、「扱此間心付け、試し見る彼の大工、最前かれが妻女とて、用有りけに來りし

が、昔を慕ふ詞の端、疑ひもなき惡七兵衛景清と、立間に知つたる故、普請に事寄せ脚代へ上け置いたり。年頃日頃親子が頼み、夫の仇讐の意趣、晴さん時節到來せり。不便や讐の箕尾谷が、未だ此世に存らへ居て、斯くと傳へ聞くならば、嘸本意なくも口惜しからめ。とは思へども手に入る敵、やみくゝと逃がしなば、月夜に釜のぬかり武士と、世上の譏恥しく、番手はかねて定め置く、はや踏込め」と下知やるにぞ、心は一致の信濃育、木曾の梯それならで、上る梯の子村鳥の、羽音もかくや脚代の、踏所もしどろに寄せかゝる。惡七兵衛景清は、心に豫てまうけの敵、土藏を小楯に突立つて、「ヤア物々しや事をかしや、景清を搦めんとは、大黒柱を蟻の髭」と、嘲笑ふ隙間を見て、「捕つた」とかゝる一番手、はつしと蹴られころくく、勾配するどき瓦屋根、巴に並んで三方より、駈寄ればまつかせと、手斧にちよんと首飛んで、こけらを風の吹きしくごとく、遙かに投けてやり鉋、通さじ者とひよつと出の、頭はつしとさい槌に、目を白黒と三ツ目鉋、此世の息をはなし鑿、手竝に鐵鏈鋸の、目に立つ相手もあらばこそ、一度に哄と群るを、當り任せに引抓み、ばらりくゝと投げはふるは、大工のわざとて棟上の、餅撒き散らす如くなり。大彌太今はたまりかね、「ヤア娘我に續け、惡七兵衛景清が、鬼神にてもあらばこそ」「オウオ父様さうでござんす、人と人との勝負つく、命を捨てば易か

りなん」と、親子うなづき梯の子に、駈上らんとする所、「しばしく根井殿、お待ちあれ」と聲を懸け、跳り出づるは以前の左官、大彌太焦つて、「ヤア緩怠なる妨け奴、おのらが出る場所に非ず、退去れやツ」と怒るにぞ、「オ、名乗らねば實に尤、斯く申す某こそ、聲舅の契りをなし置く箕尾谷四郎國時」と、詞も引かぬにはつたと睨め付け、「しらぐしき紛れ者、儕れ誠の箕尾谷ならば、疾くより名乗つて出で、惡七兵衛景清を、搦めんと思ふ氣はなくて、三里下つて箕尾谷とは、ウ、ム聞えたく、扱は景清が一族な、我々に心をゆるさせ、此場を遁さん計略、娘構ふな捨置け」と、又駈出すを抱き留め、「御尤の御詞、付け狙ふ景清と名を聞きながら、躊躇ひしは知し召さすや。日本に惡七兵衛二人有り、内一人は似せ者にて、伊庭の十藏と云ふ男子、様子を語れば事長し、其實否を正さん爲、最前より差控へ、事の様子を窺ふに、豪氣の働き手竝の程、正眞の惡七兵衛に極まつたり。然る上は箕尾谷が、武運を開くは此處ぞと思ひ、罷出でたる某が、誠の扮装御覽あれ」と、搔投り捨つるたちつけの、菖蒲草には引換へて、勝負に益有る肌著の小具足、家職にあらぬ小手脚當、兜頭巾を覆ひたる、下は誠の星甲、鍔はきれてと諷はれし、名は源平に隠れなき、箕尾谷とこそ知られけれ。白梅嬉しさ飛立つばかり、「扱はお前が箕尾谷様、縦へ御身の恥辱は有りと、連れ添ふ女房に何遠慮、疾くに所在

もお知らせ有り、健で居る氣遣ひすなと、つい一筆の便して、落付かせうと云ふ氣もなく、あんまりな氣強さ、聞えませぬ」とかきくどく。「尤の恨ながら、惡七兵衛景清に、廻り逢はざる其内は、面目もなき箕尾谷と、忍びくらしし甲斐有つて、今日只今景清に、廻り逢ひしが結ぶの神、運つきて打たるゝとも、未來の契違へじ」と、云ふに悦ぶ父の大彌太「頼もしく、其詞が取りも直さず婚禮の盃、我手に入つた景清を、御邊に任すが聲引出、舅が寸志受取り給へ」「ハア忝き御賜、祝ひ納むる縁の綱」と、捕縄手繰り大音上げ、「上總の七兵衛景清は何處に在る、去る元暦の戦ひに、見參したる源氏の武士、箕尾谷四郎國時、汝に廻り逢はん爲、假に扮しの左官が泥鰌先、勇氣の荒塗打ちこほち、三寸繩に括り上げん、覺悟々々」と呼はつたり。景清こらへず進出で、「珍らしや箕尾谷、昔の弓矢引きかへて、汝も我も職人業、庫の鉢巻引きしめて、首の骨こそ強くとも、此七兵衛が腕先に、受取普請の力業、手並の手間賃覺えあらん。猶も恥辱の上塗せよ」と、互に付け寄る身の構へ、眼を配り氣を配り、踏む脚代の壇の浦、八島の戦、今此處に、見るやとばかり挑み合ひ、しばし勝負も付かざりしが、互に引組む脚代の、板踏碎き廣庭へ、どうと落ちたるはぶみの拍子、景清上に重なりしを、えいやと返す箕尾谷が、一念力の一筋に、絡むる繩は勇士の意地、時の運命是非ぞなき。誰かは斯くと告

けたりけん、妻の阿古耶甲斐々々しく、幼子背にしつかと負ひ、上帶しめて腰刀、息をはかりに駄付けしが、夫の縄目に目もくれて、胸は涙の闇ながら、そも何者の所爲ぞと、邊りを見廻し、「ヤア此方は箕尾谷殿、京から下り先々へ、付けて廻つて聞えぬ人、又ぬつべりの口上手に、此方の夫をたばかりしか。サア千も萬も入らぬ、彼の縄解いて主返しや、否か應か返事次第、女子が指いても刀は刀、覺悟の魂違ひはない」と、反を打つてつめかくる。箕尾谷騒がず、「有繋は女血迷うたな、都にて逢ひし時、景清に廻りあはど、必ず本望遂ぐるぞよと、番ひし詞忘れしな。何事も定まる運と思諦め、はや歸れ」「いやくいやく諦めまい、恩も情も義理も法も、夫には換へられぬ」と、すらりと抜いて打ちかくる。どつこい爲せぬと白梅が、中に隔つる長刀の、鎧をけづる女同士。惡七兵衛立上り、戦ふ阿古耶に押隔たり、後手ながら引つすゆれば、「なう情なや景清殿、此の期に及んで妻子の命、構うての仕業か、せめて女の念晴し、針でついた程なりとも、箕尾谷に手を負はせ、死にたいはいの」と齒がみをなし、身を悶えたる叫び泣、さすがの景清もてあつかひ、しばしあぐみて居たりしが、「ヘツエ是非もなや面目なや、某息の通ふ中、詞には出さじと、思ひ極めしことながら、是なる女が方々を、敵よ仇よと付け狙ひ、道に背かん不便さに、仔細を語る聞いてたべ。ナニなう箕尾谷、御邊は弟、こりや我

は兄、一腹一生の兄弟なるは」と、云ふに人々顔見合せ、是はと驚くばかりなり。箕尾谷更に信用せず、「我が父母に離れしは八歳、はや東西も辨へたれば、對面はあらずとも、兄有りと云ふこと噂にも聞くべき筈、いか様仔細もあらんが、先づ父母の住所、名字系圖は如何にく」
「チウ父の名は愛甲の太郎國久とて、源氏武士の浪人、母の氏は平家の侍上總の一統、住所は相州箕尾が谷、其時我は十一歳、御邊は二歳、母の由縁の上總の家より、某を養子にせんと只管の懇望、父國久の仰には、よしみ有る上總の家、筋なき事と云ふにもあらず、養子と成つて平家に仕へよ、去ながら、今より後は親子兄弟音信不通、それを如何にと云ふに、二歳の弟が人となり、父が名字を受けつがば、兄弟源平と引分かり、一戦に及ばん時、平家の方に兄有りと知るならば、恩愛に逼り義理に迷ひ、思はぬ不覺を取りもやせんと、行末思ふ親の慈悲、弟が爲と思ひ、一生不通にしてくれるが、却て親への孝行と、理に當りたる父の詞、我はそれより平家と成り、御身は未だ二歳にて、何辨へもあらぬ上、父母深く隠せしなれば、兄弟有りとも知れぬ筈、我も御身の面體は覺えず、愛甲の家の名字、改めしとは元より知らぬ、箕尾谷四郎を弟と知つたる證據は、こりややい女房、我懷の一包、人々に見せてくれよ」と取出させ、壇の浦の戦に、引斷つたる兜の鏝、我高名の印ぞと、取つて歸り能く見れば、「裏書に記せしは弓

矢神の御詫宣、八幡座より鉦まで、書下したる父が筆、則ち愛甲の名字の因縁、愛する甲は家の重寶、是を著せし箕尾谷は、我弟にて有りける物を、あゝよしなき手柄達と、悔むにかへらぬ浦波の、泡と消行く平家の果、我一人残りしは運強き景清、頼朝を討つべしと、不敵にも思ひ立ち、根氣を碎くに甲斐もなく、無念の月日を暮す中、箕尾谷四郎國時が、我を狙うて尋ぬると、是なる阿古耶が物語、つくづく思ひ廻らせば、實の父が形見と云ひ、廣い天地の其中に、たつた獨の弟、憐をかくるは兄の道、所詮頼朝を討つたるとて、昔の平家と取立つる、公達とてもあらばこそ、此上は我身を捨て、弟に高名させ、弓矢の家を起さんと、思ふに幸ひ、縁を引いたる此屋敷、御邊に尋ね逢ふ物か、二つには又運に叶ひ、頼朝に出つくはさば、本望とけんと入込みし、鎧 思案の拔目なく、廻り逢うたる我弟、命を惜しまぬ働きを、感ぜし故に景清が、褒美の繩目に及びしぞや。只今返す其鉦、兜に繼いで家も繼ぎ、手柄は輝く星兜と、武士の名を照してたべ。此上に兄なりとて繩を解かば、直に勘當他人と成り、景清取逃しては、恥辱に恥辱重るが合點か」と、裏釘かへす詞詰、心にこたへて頼もしき。箕尾谷はつと飛退去り、頭を地に付け涙をながし、「親の御慈悲兄上の御情、何と報ぜん詞もなし。知らぬ上とは云ひながら、勿體なくも組伏せて、昔の武士に歸らんと、笑を含みし淺ましき。六度

契つて兄と成る、恵も有るに弟は、七度の結び返しもせで、結び絡むる縛繩、天の照覽空恐ろし。よし御勘當あらばあれ、いで縛めを」と立寄れば、振放つて、「愚々、弟と知らず兄と知らず、知らぬ昔は歸らぬ道、互の因果は絢へる、繩目と思へば悔もなし。女房ももう吠えな、豫てかくと語りなば、心落さん不便さに、是までは隠し居たり。鎌倉へ引かれなば、大方永い別れならん。何云ひ残すこともないが、娘を無事に」とばかりにて、餘所目遣ひに紛らす涙、阿古耶はとかうの返答も、なき沈みたる憂き思ひ、察し遣りて白梅が、「わたしが繩をときますれば、何處へも障りはなし」と、又景清に取付けば、「ヤア小ざかしき弟嫁、此繩解いて侍捨てさせ、誠の左官と成り下らせ、土に夫の顔汚せか。サア一時も早く鎌倉へ、伴へやツ」と立上れば、「情ない兄人、某が身にも成り、思ひやつて」とかきくどく。「ヤア聞分もなき男子」「イヤ御身こそ聞分けなし」と、争ひ果しも、なけきに沈むは二人の女房、根井太夫横手を打ち、「仁なる哉義なる哉、先刻より感涙に目を泣腫し候ふよ。箕尾谷が心底のせつなさ、推量はしつれども、景清の志、深き辭退は却て不孝、せめての恩を報ぜんは、阿古耶殿を身に引受け、幼き娘を養子とせよ。此大彌太が初の孫、時しも三月十八日、今日の祭の神堅く、人丸娘と名を呼びて、育てる老の樂み」と、歎の中の悦び顔、景清あつと頭を下け、「頼もしき御詞望は足

りて一門一家、廻り逢ひたる月も日も、其元暦の八島の戦、取りも直さず三月の十八日、信ずる佛の御縁日、臨刑欲壽終、念彼觀音の力を得んこと疑なし。急げや急げ」と先に立ち、勇むは繩付繩取は、心惜れて立ちかぬる。阿古耶は夫に恥ぢらひて、涙吞込むくもり聲、幼き娘を抱き上げ、「是なう今の父様が、鎌倉へござらしやる、目出たう頓てお歸りと、サ、さうくしてたもふ。其次手に元の父様、顔の見納め見せ納め、永いさらばの、サさうをしや」と、我身の心かこつつけの、詞も涙に咽び入り、身を打ちふして歎くにぞ、かゝるあはれにおほ彌太も、涙湛ゆるしばく目、「浮世の中に武士程、義理の悲しき物はなし、云ひたさ泣きたさこらゆる辛さ、なぜに二人は兄弟の、左官や大工に生れなんだ。職人の身ならばなア、斯うしたことは有るまい物」と、有繋は老のくりごとに、白梅阿古耶も顔見合せ、包みかねたる歎の色、わつと涙の糸櫻、庭の立木に紛ふらん。景清わざと怒りをなし、「ヤア未練なり愚なり、源氏育ちの侍は、會者定離をも辨へず、妻子を忘れ親を忘れ、弓矢の義心も知らざるか、恥を恥とも思はずや」と、聲あらゝかに言放せば、大彌太歎き押留め、「實に誤つたりそれよく、音に聞えし景清を、搦め取つたる箕尾谷が、譽れは朽ちせぬ石疊み、根井の太夫が家名をつけん」と、門出壽く言の葉に、深き涙を忍びの緒、兜も昔に立ちかへる、鰐の星の花の兄、勝つ色見する

御惠^{おめぐ}みと、勇^{いさ}み立つたる匂^{にお}ひ鳥、連^{つら}なる枝に若木の花嫁、老木の松^{まつ}に嬰兒^{みどりこ}の、可愛盛^{いたいけずか}り見殘^{みのこ}して、惜^をしむや春の星月夜、鎌倉^{さつ}さしてぞ三重^{いそ}急ぎける。

第五

百戰百勝、勇士^{ゆうし}の名^なを定^{さだ}め、死^しを易^{やす}くして名^なをあらはすといへり。上總の景清、自ら頼朝の手に渡れば、扇^{あふぎ}が谷^{やつ}につめ牢^{ろう}をしつらひ、取^とつて押入^{おし}れ、警固^{けいこ}は在鎌倉の諸大名、一日一夜づつ、番代^{ばんがは}りに預^{あづか}りて、嚴^{きび}しく非常^{いふふ}を警^{いまし}めらる。根井の太夫希義、當番^{たうはん}にて未明^{みめい}に相詰^{あひつ}め、見れば門々當所^{かきくたうしよ}の幕^{まく}、海扇^{いたちひ}の紋所^{もんきこ}、「昨朝より今朝までは、岩永左衛門當番^{いふえさゑもんたうはん}よな、根井の太夫番代^{はんがは}りに參^{まゐ}つたり」と、言入^{いひい}るれども、役所^{やくしよ}を渡^わす體^{てい}もなく、走^{はし}つて出^いづる人、息^{いき}を切^きつて戻^{もど}る人、足^{あし}を飛^とばせ、櫛^{くし}の齒^はを引くごとくなれば、何事^{なにこと}やらんと根井の太夫、不審^{ふしん}ながらも立ちやすらひ、返答^{へんたふ}おそしと待ち^{まち}るたる。しばらく有^ありて、「御通^{おとほ}り有^あるべし」と案内^{あんない}させ、岩永左衛門悄悄^{しやうしやう}と立出^{たち}で、「ヤア根井殿、早速^{さつそく}の御番代^{ごばんがは}り御大儀^{ごたいぎ}千萬^{せんはん}、お目^めにかよつて詞^{ことば}もない、先^{まづ}以^{もつ}て箕尾谷殿、景清^{かげきよ}を生擒^{いけ}り、高名^{ひなな}比類^{ひるい}なく、貴殿^{きでん}も昔^{むかし}に立ちかへり、御親^{ごしん}子^し並^{なら}んでの御勤^{ごつご}、目出^{めで}たいと申^{まを}さうか、御大悅^{ごたいえつ}推量^{すいりやう}致^{いた}いた。扱^{さく}其景清^{きんけい}に付^ついて、ちと御了簡^{ごれうけん}に預^{あづか}らねばならぬ譯^{わけ}有^あり、

お聞きなされ、牢を脱けついと致した」ととは入口の錠下さずか、但しは水道廁などより脱け出でしか、いづれの道にも不念なり」と、肝つぶせば頭を掻き、「それなれば下々の不念と申す分も有らうが、聞いてたべ、櫟白櫛櫛の木の、長さ一丈有る物を、大地へ七尺掘り入れ、上三尺の詰牢、櫛で蛛手格子を切り組み、一尺二寸の大釘、うらを返さずひつしと打ち、足を牢より外へ引出し入れ違へ、七十五人して引いたる楠にて上げほだしを打たせ、十挺詰鐵たうたう樞、大盤石を積み重ね、是には根掘の大竹、筒に切つて擔かせ、身動もならぬ、是御覽なされ、此牢を破りました」と、幕引きのくれば立寄り見て、びつくりし、「是程丈夫に拵へたを破る音が、御邊の耳へ入らざるか」「面目もない、側に居て微塵も耳へ入らず、くつつりと寢た間の夢程も存ぜんんだ。只今より明朝までは貴殿の御番、此通り言上なさるれば此岩永、好い仕合で遠嶋は見えて有る。御了簡と申すは餘の儀でない、方々へ追手をかけたれば、召捕つて歸るは早うて五つ、遅うて四つまで、沙汰なしに成され下さるれば、大名一人御取立て、ハテ目に見えぬことに堂塔建立さへなさるよちやござらぬか、根井殿、ナ申し」と、甘へかよれば、「何さく、箕尾谷といふ臆病者の子を持ち、とぼしりのかよつた此太夫に頼む事は無いはず、ハ、、」と苦笑ひ。「是は術ない、それを此處で仰られては消えたいく。白梅殿御

婚禮、何やかやのお悦びに免じ、是非お頼み」と手を摺る所へ、荒木源五息を切つて駈け付け、
 「悪七兵衛景清を、三个村と申す所にて生擒り、只今はへ引いて参る」と訴ふれば、岩永いき
 いきいきり出し、「ヤア根井、頼むこと何もない、追付け景清渡し申す」と、手の裏かへす舌
 も引かぬに、前後を圍み、警固厳しく連れかへる。根井の太夫きつと見、「ムウ是が逃げた景
 清か、ハ、ハ、ハ、ハ、箕尾谷が生擒つて差上げし景清に、似は似たれどもさうでない。察するに
 是は彼の伊庭の十藏、景清にして此根井受取ること罷りならず。刻限うつる、此通り言上せん」
 と立出づる。「ア、親仁様せはしない、まあ半時待つてたべ、追付け誠のが來ますはいの。やい
 ものさ、追々に又往けく」と追つかけさせ、「扱は儕講釋師めか、下河原でも取違へ、一度な
 らず二度ならぬ妨奴、何として腹癒ん」と、立蹴に控と蹈倒し、足に任せてさいなむ所へ、
 誰訴へしか頼朝公、重忠に轡とらせ、蹄を飛ばせかけ付け給へば、岩永大きに敗亡し、頭に天
 の落ちかよるかと、土に平伏し恐れ入る。「只今言上仕らんと存する所、御駕を苦しめ奉る。
 夜前景清牢を破り脱け出て候、言語道斷の憎い奴」と、言はせも立てず、馬上ながら御聲高く、
 「牢に入れたるばかりにて、逃けうせぬ物ならば、警固を付けるに及ぶべきか。長く一人に番
 させては、怠る油斷も有るべきかと、一日一夜を限つて、かはるく警固せよと云ひ付けしは

何の爲、牢を破つたる景清に科はなし、番を怠り牢を破られ、取逃したる儗こそ憎い奴、諸士の
の見せしめ、急度刑罰に行へ、重忠」と、御立腹大方ならず見えたる所へ、箕尾谷四郎汗を浸
し駈來り、「牢を破り落失せたる景清、是へ參上仕る」と、申す詞の下よりも、妻の阿古耶に手
を引かれ、片手は杖をつくと、見れば兩眼くり出し、東西わからぬ其風情、十藏驚き走り
寄り、「御身が事を聞いたる故、何とぞ奪ひ返さんと來る所、景清牢を破り、落失せたりと尋
廻る、嬉しや好い所へ出くはせし、かねて命に替らんと、念願はこゝぞと悦び、景清是に在り
と名乗りて安々と生擒られしは、其間に落延びさせん爲、是まで來る十藏が、志は無になつた
か、直ぐに何處へも落ちてくれぬ、側からも何故氣を付けぬ妹、エ、十藏が思ふ程にない、曲が
ない景清」と、地團駄踏んで泣きければ、「なう其氣も付いたれど、儗が知つたことぢやない
と叱られて、泣いてばかり」と縄り付き、重て袖を絞りける。重忠御覽じ、「珍らしや景清、牢
を破り遁れ出でたる身の、如何なれば立歸り、殊に兩眼を抉つて盲目と成りたるは訝し。頼
朝公も聞し召す、心底を明かされよ、承らん」と宣へば、「ア、宣ふは秩父殿候ふな、お尋ね
なくとも申上けんと存する所存、餘の儀にあらず、斯く御敵と成つて付狙ふ我なれども、兎角
命を助け、御味方に召されん爲の御情、申すに及ばず、海はあせて山と成るとも、二君に仕ゆ

る我ならねば、所詮此牢踏碎き、關破りの科を拵へ、害せられんと心づきしが、思へば其日の警固の侍、牢を破られ取逃がし、我故咎に預らんも罪作りと、一日々々延せしが、昨朝よりは岩永が番に代つて、顔を見るよりあら嬉しや、遺恨有る左衛門、咎に逢ふが殺されうが、往にがけの駄賃とやらん、今宵ぞ牢の破り時と、何の苦もなく脱出でしは、外に科を拵へて、誅せられんとの我念力、もう助けては政道立つまじ、急いで、我を誅せられよ。又兩眼を抉りたること、今鎌倉の繁昌、頼朝の威勢を見るに付け、二たび仇をなすまじと、思ひ捨てよも凡夫心、見ずば怨みも起るまじと、頼朝を二たび見ぬ分別、未來遙々仇をなすまじ、恨みを殘さぬ心の誓ひ、抉り捨てたる兩眼は、頼朝殿へ景清が、今生未來の寸志ぞや。サア首打つて安堵あれ」と、首さしのぶれば頼朝公、「あつぱれ武士よものよふよ、平家の恩を忘れぬ如く、又頼朝が恩をも忘れず、月日に象る兩眼を、我故抉つたる健氣や」と、勿體なくも御大將、御落涙ぞ有り難き。左衛門一人むくりを起し、「オ左程厭いた首ならば、左衛門がさらへ落し、牢を破られ取逃した申分にする」と呼ばれば、餘りのことに御大將、兎角の御説もまします。阿古耶怵へず、「あの言うた頬はいの、目の見えぬ人の首取つて、言分に成るか、手柄に成るか、阿呆くさい」と恥かゝすれば、「女房だまれ、岩永が手に合ふ者は盲目か瞽か、子供ならで外には

なし。尤々、ならばサア首取つて見よ、梟鴟は土を圍めて我子とし、海月は鰕を以て眼とすること、楞嚴經に有りと聞く。我其の如く阿古耶を以て眼とせん、後より我を介抱し、刃の向ふ其方へ、引き廻して教へよ」と、杖打ちふつて立上れば、「源五手傳へ、盲目とてぬかるな」と、左右に別れ切りかゝる。根井親子は景清に、縁有る顔を憚つて、餘所には知らぬ氣を揉上げ、心を冷して控ゆれば、十藏は又景清が、詞の意地を立てさせんと、留めず指出す縛られながら、眼を配り、すはといはど飛びかゝらんと、打つ太刀先に氣を付けて、「そりや／＼右よそれ左よ、拂へ薙れ」と辭を懸け、我手をもつて戦はぬ、心の刃のしのぎを削り、頭に上る息烟は、火花を散すごとくにて、瞬もせぬ程もなく、岩永主従太刀打落され、二人一度にしがみ付き、取つて伏せんと身をもがく。景清ちつともたぢろかず、二人が首筋兩手に掴み、ぐつと締むれば眼を見つめ、弱る所を取つて伏せ、膝にひつ敷き、一息ついたる心の内、嬉しさ譬へん方もなし。其隙に阿古耶立寄つて、十藏が縛切りのほどけば、「なう／＼景清、一人に二人は手柄過ぎる、岩永は我に呉れ」と、取つて引立て、「科は儂が心に問へ」と、首えいやツと捻切れば、景清悦び、「儂も主の供せよ」と、源五が首も一時に、ちよいと引抜き捨てたるは、手習子供の書捨てし、筆の首抜くごとくなり。十藏側への太刀押取つて大音上、「助けんと云

ふ君には君の情有り、打たれんと云ふ景清は、二君に仕へぬ忠義有り。中を取つて此惡七兵衛景清が腹切る上は、情も忠も是までなり」と、太刀を逆手に取直す。重忠御覽じ、「ヤア、十藏、景清が事は此曉、洛陽清水寺の觀世音、君の御枕に立たせ給ひ、命を助け得させよと、御臺所も目のあたり靈夢を蒙り給ふ。それ故是まで御馬を出されたるとはよも知らじ。假にも景清と名乗つて生害せば、大慈の加護に背く理、名代の切腹、尤ながら無益なり」と止め給へば、「然らば御家人岩永を、手にかけて打つたる其誤、伊庭の十藏に立歸つて切腹せん」と、肌押しぬいで身繕ふ。賴朝扇を上げ給ひ、「やをれ十藏、左衛門を打つたる其科を糺明せば、安穩に腹切らすべきか。我此の曉景清を助けよと、觀世音の靈夢を蒙る、さればこそ左衛門が、盲目の景清に刃向ひしを制せんとは思ひしが、大慈大悲の擁護ある景清、やはか過は有るまじと思ふにたがはず、却て主従手にかよりしは、景清十藏が殺すにはあらず、二人に千手の手を貸して、惡人を殺させ給ふ、是こそ還著於本人、經文あらたに誤なき、大悲の誓ひと覺えたり。然るを汝切腹せば、菩薩の勸善懲惡の、心にたがふ大惡逆、恐るべし。今より我に奉公し、譽れを末世に残すべし。又景清は扶持すべき平家もなく、賴朝が祿も受けまじければ、飢に疲れん不便なり。兩眼は暗くとも、心ざしは日に向ふ、日向勾當の官を蒙り、馴染の平家

を琵琶に語つて、片時も昔を忘るべからず。萬事は根井親子の者、宜しく計らひ得さすべし。箇様に上下和すること、念彼觀音の御力、我が大慶是に過ぎず、いざ歸らん」と立ち給へば、夫婦兄弟箕尾谷父子、首を天地に平伏しく、詞はなくて有難涙、伏拜みく、君を傳き立歸る。佛道武道の助けとして、治まり靡く源氏の政道、萬々歳の末かけて、盡きせずつきぬ八千代の松、變らぬ色は吳竹の、節を重ねて葉も繁る、五穀成就民安全、治る國こそ三日月出たけれ。

壇浦兜軍記終